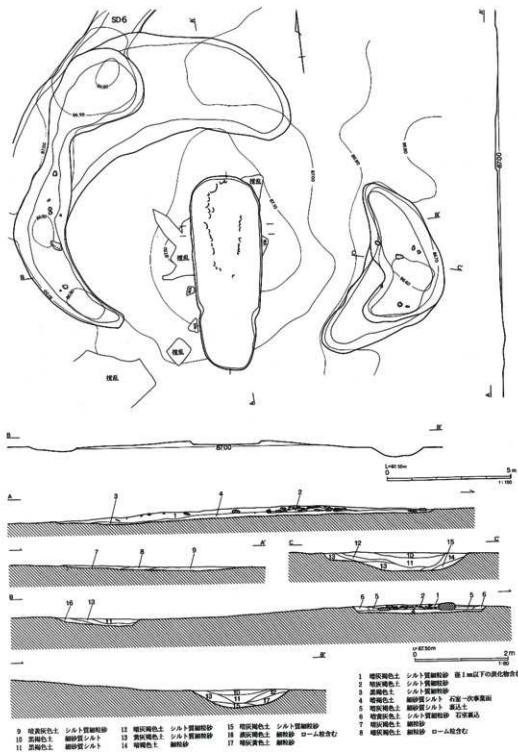
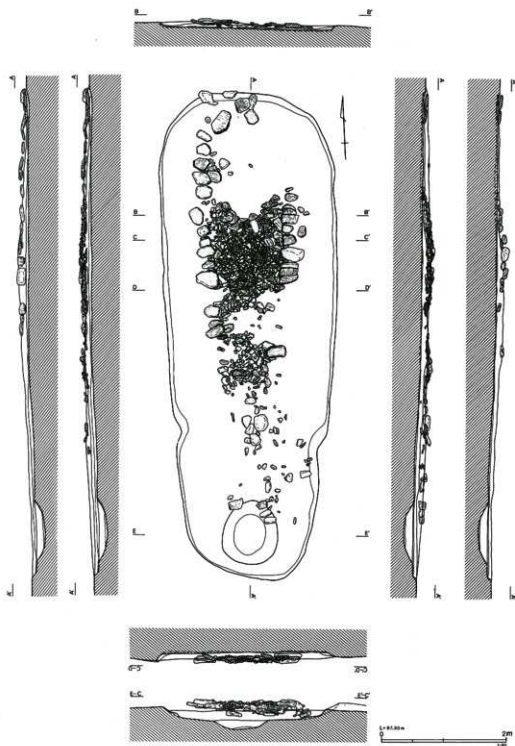
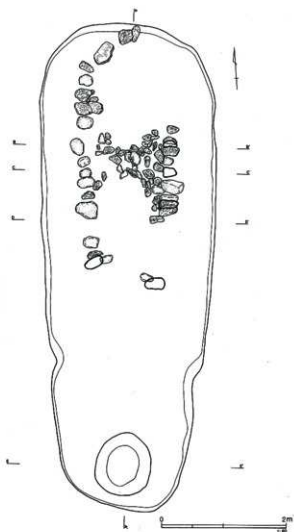




第240図 第18号墳



第241图 第18号墳石室



第242図 第18号墳石室根石

り残し部分であると考えられる。

周溝は、北西側で第6号溝と重複関係にあり破壊されていたが、第18号墳の周溝の掘り込みが深かったため、底面付近の形状を確認することができた。

また、周溝の断面形態は不整形で、幅・底面のレベルともに一定せず、主体部の北および東で幅を増し、東西両側では不規則に深さを増していた。立ち上がりはゆるやかであった。

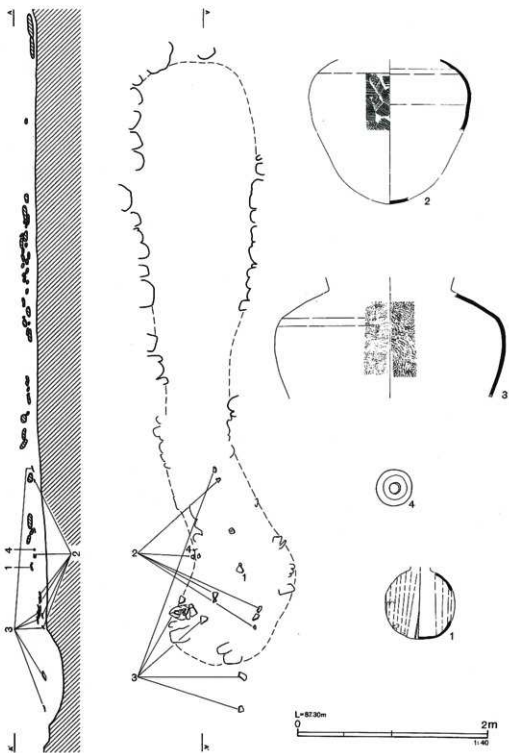
周溝規模は、内径で最大11.64m、最小10.74m、最大幅4.52m、最小幅0.76m、最深部の深さ40cmであった。

主体部は、胴張りをもつ横穴式石室が検出された。堅穴の掘り込みをもって、石室構築面を形成していた。攪乱のため玄室奥半部と羨道東部、前庭部が失われていた。また、遺存した側壁の石材はほとんどが根石で、上部構造は完全に削平されていた。主軸はN-6°-Eであった。

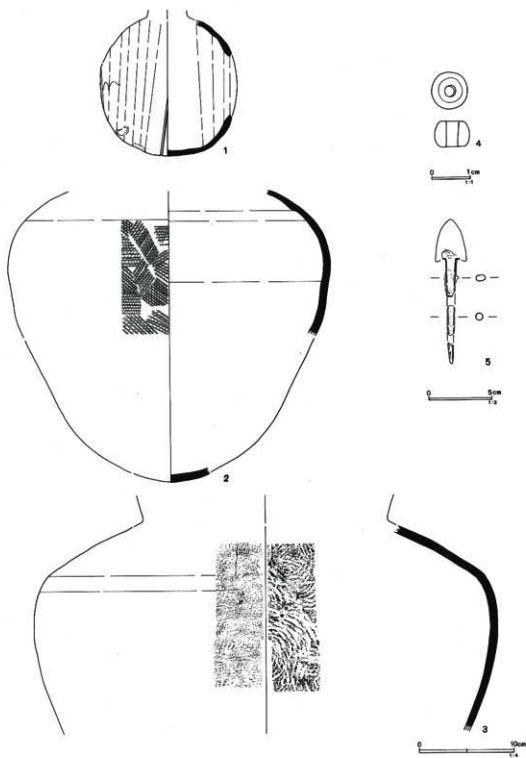
玄室側壁は緩やかな胴張りを呈し、やや奥壁より最大幅が位置する。側壁は長さ30cm大の河原石を布積みして構築されていた。石材は、点紋石墨片岩・石英石片岩などを中心とした片岩を多用し、4割程度に扁平な中～細粒砂岩が認められた。床面には長さ8cm程度の扁平な玉石が隙間なく敷設され礎床を構成していた。玄門に特殊な施設はみられなかった。

羨道は幅狭く短いもので、玄室と同様の石材・方法によって構築されたものであった。床面には長さ16cm程度の礫が敷設されていたが、玄室とは密度に大きな差がみられ、玉石の大きさの相違とともに玄室との区画を明確にするものと思われる。羨道部の側壁は一部に遺存するほかは、攪乱のため失われていた。

前庭部は長く、築造当時は陸橋部上に達していたものと思われるが、検出されたのは痕跡程度で、敷設された石材の大半は流失していた。前庭部には須恵器甕の破片等の出土遺物が集中してい



第243图 第18号坑遺物出土状态



第244図 第18号墳出土遺物

た。墓前祭や、追葬時にともなう掻き出しによるものと考えられる。

閉塞施設については、羨道部先端に径20cm程度の河原石数個が遺存しており、閉塞施設の一部であると考えられたが、具体的な閉塞状況は不明である。

根石の配置は直線的で、これを組み合わせて胴張り平面を構成したものと考えられる。側壁の上部構造が遺存しないため明確ではないが、側壁最下段の石材と配置上の「ずれ」があったものと推定される。礎床下の基礎石材は玄室中央付近に集中するが、本来は玄室全面に敷設されたものと思われる。これらの基礎石は長さ22cm程度が主体で、一部は棺床面に現われている。材質については結晶片岩が主体を占めていた。

石室規模は、推定全長372cm、玄室長265cm、同最大幅117cm、同前幅87cm、羨道長105cm、同推定幅60cmであった。

石室構築面をなす堅穴は、ほぼ楕円形を呈し南から3分の1程度の部分にくびれ部を有していた。くびれ部以南が前庭部に相当する位置であった。また、前庭部整地層下に土坑状の掘り込みが検出された。これは、第17号墳に共通する。堅穴の断面形態は逆台形を呈し、立ち上がりはやや緩かった。規模は、全長776cm、最大幅283cm、深さ9cmであった。

出土遺物のうち、1～4は前庭部1層中から、5は石室内の全堆積土について、20mm・10mm・5mm・800ミクロンの篩を用いたウォーター・セパレーションを行なった結果出土したものである。

1は須恵器フラスコ形細頸瓶の胴部である。形態はやや扁平な球形をなし、回転ヘラケズリが施される。焼成は良好で、胎土は灰黄色を呈する。軸はオリーブ灰色一透明に発色する。胎土には石英、雲母、細粒砂を含み、やや緻密さを欠く。法量は、推定値で胴部径14.4cm、胴部高14.2cmである。胴部下半には3カ所の胎土目が認められる。

2・3は須恵器甕である。2は底部および胴部上半の一部が検出されたもので、接合関係は認められなかったが、胎土および調整痕から同一個体と判断した。外面には、ほぼ全面に格子状タタキが施され、胴部最大径のやや下方には同じタタキ具によるヨコナデがみとめられる。焼成は良好で、灰色に焼きしめる。胎土には石英、長石、細粒砂、白色針状物質を含む。南北企産と推定される。法量は、推定値で胴部最大径31.8cm、胴部高約32cmである。

3は、外面に格子状タタキ後、スリケン調整が施される。内面には、青海波状の当て具痕がみられ、肩部以上では下から上へ、胴部下半では上から下へのタタキが行なわれている。焼成は良好で灰色に焼きしめる。胎土には石英、長石、酸化鉄粒、細粒砂を含む。肩部径47.6cmである。

4は滑石製丸玉である。褐色を呈する。孔内面には縦方向の擦痕がみられる。穿孔にともなう仕上痕であろう。最大径9.3mm、厚さ6.8mm、孔径2.8～3.0mm、重さ0.86gである。

5は有茎平根式鉄鏃である。玄室棺床面西側の礎床石材間の堆積土中から、10mmの篩によって検出された。3片は接点をもたないが、材質・幅・厚み・腐食状態などから同一個体とみられ、茎部には装着痕と木質部が少量遺存している。鏃身部分は両刃丸造りの逆刺をもつ長三角形式で、箆被部分は欠損して不明であるが、短頭・闊箆被で、やや長い茎部をもつものと推測される。現存部分の合計長は約7.5cmであり、幅3.0～6.1mm、厚さ4.2～5.1mm、重さ6.05gである。

なお、玄室棺床面上に四肢骨他の骨片が検出された（付編2参照）。

3 小結

今回調査された18基の古墳は密集状態にある円墳群で、典型的な終末期群集墳である。荒川流域にはほぼ等間隔に古墳群が分布するが、調査前の段階で樋ノ下遺跡周辺には、古墳分布は確認されていなかった。分布域は、段丘面に沿って北東方向に続くものと考えられるが、調査区北側にみられる小河川跡の流路によっては、第12号墳を境に収束している可能性もある。

古墳群の造営時期は、出土遺物からみる限り、荒川下流2km付近に広がる小前田古墳群と一部重なるものの、中心的な時期はやや遅れ、およそ7世紀の中頃以降のものと考えられる。古墳跡は、墳丘および主体部の上部を近世段階の削平と工場建物の基礎による擾乱のため破壊されていた。このため、各古墳についての情報は限られたものとなった。

検出された外部施設は、第5号墳に墳丘の一部が残存していたのを除くと、その他の古墳では周溝に限られる。周溝は1カ所に陸橋部をもつもので、周溝内径で直径10m以上のものではほぼ南向きに、その他では近接するやや大形の古墳の陸橋部の方向に向く状況が看取された。周溝内には、人頭大の川原石が流入している場合が多く、墳裾に低い石積みをもったものと想定される。主体部は第5・6・7・8・11・15・16・17・18号墳で検出されたが、すべて胴張りのある横穴式石室で、最大幅が玄室中央にあるものと奥壁よりにあるものの2形態が認められた。石材は、荒川河岸に産する川原石を主体とし、一部に末野地区から長瀬にかけて産する結晶片岩が用いられていた。第5・6・8・15・16・18号墳では人骨が検出されたが、第5・6・15号墳を除き、埋葬および被葬者の状況は明確にはならなかった。また第8号墳では、黒紫色の砂利混じりの整地層を挟んで、2面の棺床面が検出された。出土遺物は石室内にはほとんどみられず、第8号墳追葬面において頭部相当位置に一对の耳環が検出された程度である。その他の遺物は、すべて前庭部、周溝内、墳裾から検出された須恵器フラスコ形細頸瓶・大甕、土師器杯、鉄鏃、玉類などの終末期的な様相を示す遺物である。

今回の発掘調査では、古墳の構築技法にみられる特徴に注意し、基本的には築造過程を遡及して解体する方法をとった。全石室に共通するの構造上の特徴は、堅穴の掘り込みをもって石室の構築面とし、半地下式としていること、控積みをもたず、粘性の高い土壌を用い裏込めとしていること、奥壁に板石を用いていたと想定されること、玄門閉塞に板石を、羨門閉塞に川原石を用いていることなどである。構築面を形成する堅穴は、残存した根石・裏込めなどの石材を含めて、第2・4・12号墳でも検出された。

その他の特徴的な構築法をあげれば、およそ次のようである。第5・8・11号墳では、玄室の裏込めにシルトを用いているのに対して、羨道部の裏込めはシルトに玉石・割り石を混入していた。第5・6・15・18号墳では、根石の位置と側壁基部をなす最下段の石材の位置との間に10cm程度の「ずれ」がみられた。また、第6・15号墳では奥壁板石の設置孔が検出された。

これらの特徴は、周辺の古墳群においても認められ、玄室の形態・時期などに符合するもので、荒川流域の終末期における胴張り横穴式石室の築造時期について示唆を与えるものと考えられる。しかし、現状では、構築技法と構造についての詳細な調査例が少なく、類例の追加が待たれるところである。その意味で、石室の調査においては築造過程を遡及することによって、各部分の構造的な関係を把握し、構築技法上の特徴を明らかにする必要があるといえよう。

IV 平安時代の遺構と遺物

1 概要 (第245図、第8表)

平安時代の遺構は、主に調査区南西部の寄居面Ⅰ・Ⅱに分布する。古墳群とは空間的な重複がみられず、往時には墳丘を避けて集落を築いたものと推定される。

検出されたのは、およそ10世紀代前半を中心とする集落跡で、遺構の分布状況から集落中心部はさらに西側の現寄居町保健所周辺にあると考えられる。

特筆されるのは、堅穴部をとりまく柱穴列をもつ住居跡5軒が検出されたことである。この柱穴列は壁を垂直に立ち上げ側壁とする際の側柱穴列と考えられ、柱穴内の土層にのこる柱材の痕跡は、側柱が直立したことを示すものであった。本来、樋ノ下遺跡の多くの堅穴住居跡にみられる施設であったと考えられるが、旧地表面を形成した地盤層が流出し、あるいは攪乱されたため、確認面が側柱穴底面以下となった住居跡では、検出されなかったものと推定される。

遺構の分布域のうち、寄居面Ⅰでは工場建築物の基礎により激しく攪乱されているが、攪乱を逃れた部分には、堅穴住居跡を中心とした遺構が確認されている。このことから攪乱により破壊された遺構が少なくなかったことが予想される。

寄居面Ⅱは旧自然堤防の後背湿地が調査区となったが、寄居面Ⅰ同様、全面的に遺構が分布し、調査区外となる玉淀水天宮の区画および南側の道路部分にも集落の一部がかかるものと推定される。寄居面Ⅱの遺構は、堅穴住居跡と土坑、掘立柱建物跡などで、集落の周縁部に長楕円形平面の土坑群が存在した。寄居面Ⅱでは土壌の堆積が盛んであったため、遺構の遺存状態がきわめて良好であり、遺構間における土器の接合関係なども把握することができた。

上記の状況をふまえ、遺構の周辺の状況を明示するため、以下では便宜的に寄居面Ⅰ、段丘崖、寄居面Ⅱの各地形区分に即して記述する。

(1) 寄居面Ⅰに分布する遺構 (第246図)

寄居面Ⅰにおける遺構分布範囲は標高89.1~89.4mの間で、第6・7・8・9・11号住居跡、および第12号土坑が検出された。

寄居面Ⅰは全面積の2分の1程度を攪乱されており、相当数の遺構が失われているものと思われる。このため、本来の地形・遺構分布は明らかにできず、遺構間相互の遺物の接合関係を認めることもなかった。

寄居面Ⅰの集落は、散漫な住居跡の分布密度を保ちながら展開し、調査区北端を東流する小河川の侵食によって段丘面が途切れる部分で分布を収束させていた。

寄居面Ⅰの地盤は細粒砂で形成されており、造山運動による隆起で水成層の堆積がなくなると激しい侵食を受け続けたものと推定される。平安時代の集落が営まれた時期には侵食が途絶え、細粒砂の上部に有機質成分を含む薄い黒褐色シルト層が形成されたが、集落が機能を停止すると再び激しい侵食作用が起こり、遺構面をなす土壌が寄居面Ⅱに流出し、二次堆積のシルト層を形成した。

寄居面Ⅰの遺構にともなう遺物は、寄居面Ⅱに包含層として流入していると思われる。寄居面Ⅰで検出される遺構は極度に浅く、土坑がきわめて少ない。また、遺物量も少ないが、こうしたことは堆積状況と侵食作用に起因するもので、同一遺構面で縄文時代前期に属する第5号住居跡などが確認されている。

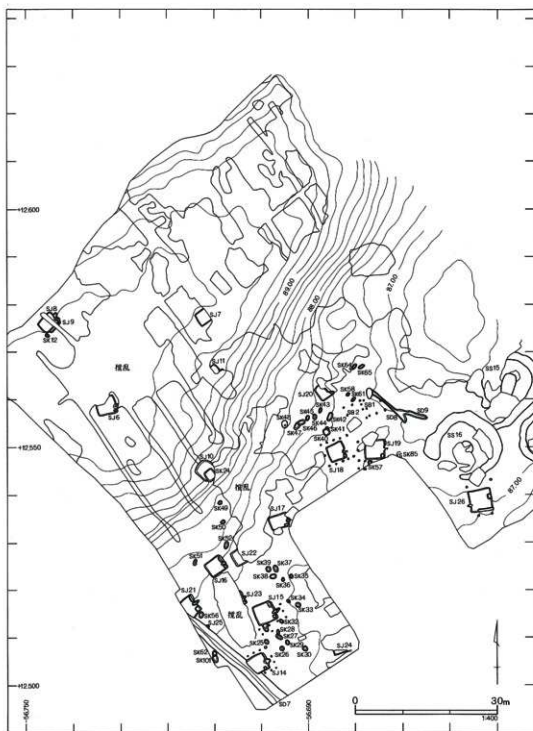
検出された住居跡は、主軸方向に長い長方形を呈し、北東方向にカマドを備え、カマドに向かって右手の壁際に貯蔵穴が掘られる形態を基本とする。住居の主軸方位では、第6号住居跡のみがN-73°-Eとやや大きく東に振れるほかは、N-42°-EからN-57°-Eと大きな差異をみない。住居の立地は平場を好み、段丘崖の斜面にかかる住居跡は第11号住居跡に限られた。

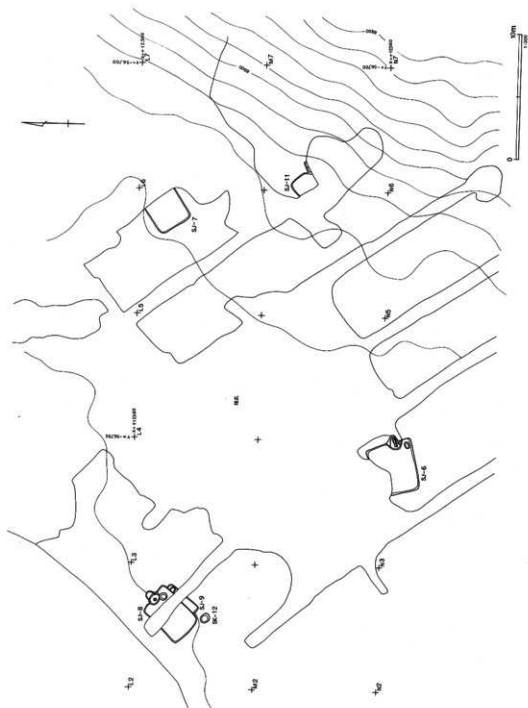
住居跡と土坑の関係は明確ではないが、第12号土坑については第8・9号住居跡のいずれかに属するものと考えられる。

第8表 平安時代住居・建物跡一覧

番号	規 模			方 位		柱 穴	貯蔵穴	関係遺構	備 考
	長軸	短軸	深	主 軸	カマド				
SB1	409	314		N-21°-W					掘立 2間2間
SB2	420	398		N-22°-W					掘立 2間2間
6	410	372	18	N-73°-E	N-75°-E		竈南		
7		284	12	N-57°-E					
8	400	264	8	N-47°-E	N-42°-E		竈南	SK12	SJ9と重複
9	297		10	N-42°-E			南東壁際	SK12	SJ8と土器接合
10	380	378	44	N-47°-W					堅穴状遺構
11			4	N-51°-E	N-51°-E				
14	420	346	44	N-61°-E	N-63°-E	竈穴外に 側柱穴列	竈南	SK25	側柱列規模は 560以上×500
15	442	416	40	N-67°-E	N-64°-E	竈穴外に 側柱穴列	竈両側		側柱列規模632 ×478 階段状の 入口部あり
16	392	326	32	N-56°-E	N-57°-E		竈両側	SJ14,17, 21,SK39	完形土器極めて 多い
17	388	289	13	N-74°-E	N-73°-E		竈南	SJ16	
18	362	344	36	N-66°-E	N-66°-E	竈穴外に 側柱穴列	竈南	SJ19	側柱列規模は 606×512
19	420	408	40	N-90°-E	N-90°-E	竈穴外に 側柱穴列	竈南	SJ18	側柱列規模は 608以上×442
20	340	292	30	N-53°-E	N-51°-E		竈南		
21		420	24	N-51°-E	N-54°-E		竈両側		
22		334	46	N-61°-E					堅穴状遺構か
23		270	12	N-65°-E	N-65°-E		竈南		
24				N-71°-E					
25					N-40°-E				
26	458	456	44	S-81°-W	S-81°-W	竈穴外に 側柱穴	東壁際		西竈。側柱列規模 は580×766

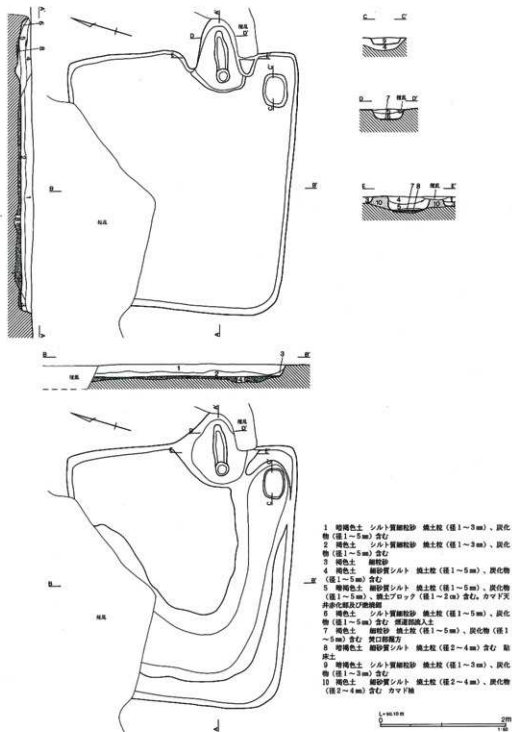
(註) 単位は cm



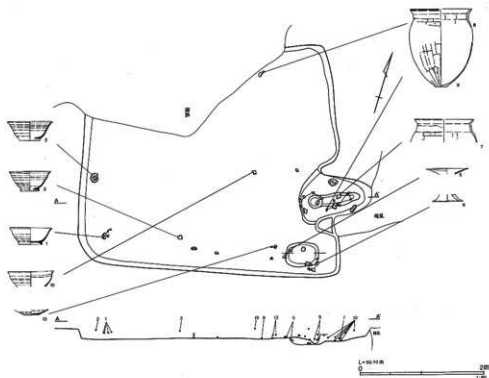


第246図 寄居面Ⅰの遺構分布

第6号住居跡 (第247~249図、第9表)



第247図 第6号住居跡



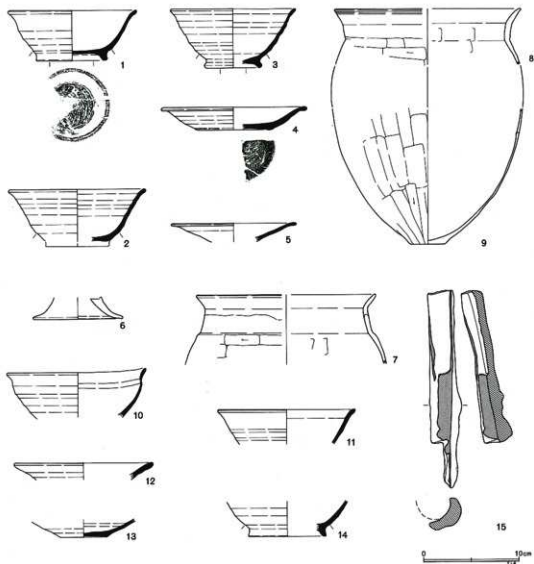
第248図 第6号住居跡遺物出土状態

M-3・4、N-3・4グリッドに位置し、標高は89.9mであった。平面形態は主軸方向に長い長方形を呈し、長軸長410cm、短軸長373cm、深さ18cmであった。竪穴部の主軸方位はN-73°-Eであった。覆土は炭化物粒を多く含むことを特徴とし、貼り床等の建築土壌はシルトを、覆土は細粒砂を主体としていた。

カマドは東壁面やや南よりに造りつけられ、軸方位はN-75°-Eであった。短い袖をもち、燃焼部には壁あるいは袖の芯として用いられた石材が遊離して出土した。これはカマドの上面から入った攪乱によるものとみられ、南側の袖は上部のほとんどが失われていた。焚き口は袖端部より住居中央方向にやや突出して設けられ、焚き口中央右寄りに支脚の設置孔が確認された。カマド内からは複数の甕が出土しており、二つ掛けが想定される。燃焼部底面は床面より約4cm程度低くなるが、貼り床の厚さに相当し、竪穴部の掘削時には同一レベルまで掘り下げられていたものと思われる。

貯蔵穴はカマドに向かって右手に認められた。住居の主軸方向に長い隅丸長方形を呈し、深さは10cmであった。

床面は地山が非常にソフトなシルト質細粒砂層であったためか、全面に貼り床が施されていた。貼り床層は3～6cm程度の厚さであるが、南から西側にかけては、軟弱な地盤を反映して掘り方が溝状に深さを増していた。硬化面、壁溝、梯子穴、柱穴等は検出されなかった。



第249図 第6号住居跡出土遺物

出土遺物はほとんどが細片で、完形品はみられなかった。出土土器総量は、須恵器片107、土師器片363、計1051gで、図示できなかったものを含めた推定個体数は、須恵器碗12、杯5、皿2、甕2、土師器甕3、台付甕2、および鋳型1である。

1～9はほぼ床面直上で検出されたものである。10～15は覆土中から検出されたものである。

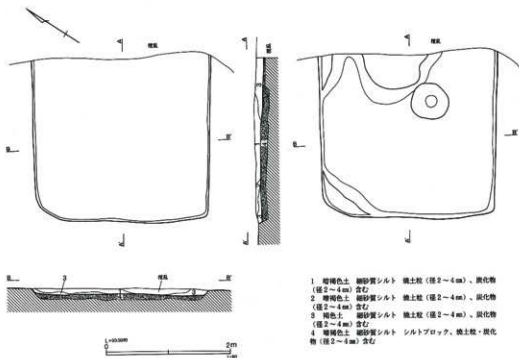
カマドおよび貯蔵穴で、土師器甕、台付甕が集中して出土した。このほか東から西側の壁際には須恵器碗・杯などの供膳器が認められた。1・2の碗は、低い高台と下方でやや湾曲する体部、「く」字状に外反する口縁部を特徴とするが、10・11では短く外反する口縁端部が極端に肥厚する。皿は、4・5が反りをもち外反する口縁部であるのに対して、覆土中出土の12は部厚く直線的に外反する口縁部をもつ。

第9表 第6号住居跡出土遺物

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	その他
1	椀	13.6	5.2	7.5	ABDEG	D	黄橙	55	回転糸切 付高台
2	椀	(14.4)	5.5	(6.8)	BCEG	B	黄灰	40	回転糸切 付高台
3	椀	13.2	6.2	6.1	BDFG	B	灰	40	回転糸切 付高台
4	皿	(15.9)	2.4	(8.8)	ABDEFG	B	黄灰	25	回転糸切
5	皿	(13.2)			A-G	D	橙	20	
6	台付甕			(9.6)	ABEG	A	褐	5	
7	甕	(19.0)			ABCEG	A	赤褐	15	外ヘラケズリ、内ハケメ状ナデ
8	甕	(19.6)			A-EG	A	橙	20	外ヘラケズリ、内ヘラナデ
9	甕			(3.2)	A-EG	A	橙	15	8と同一個体と思われる
10	椀	(14.7)			DFG	B	灰	30	
11	椀	(14.6)			ABEFG	B	灰黄	20	
12	皿	(14.7)			AEG	A	灰	10	
13	皿			(5.0)	ABDEG	D	橙	15	
14	椀			(8.2)	ABEFG	C	黄橙	10	回転糸切 付高台
15	鍋脚部鋳型	現長21.2、幅4.2			ABCEFG	B	黄橙	45	一部に鉄分凝着、内径3.0

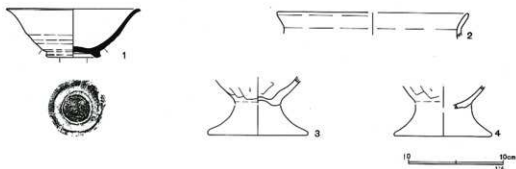
第7号住居跡 (第250～251図、第10表)

L-5グリッドに位置し、標高は89.8mであった。工場建築物の基礎による深さ1mにおよぶ攪乱のため、北東部が失われていた。残存部位から、全体として長方形を呈するものであったことが窺われた。長軸長は明確にできなかったが、短軸長284cm、深さ12cmを測り、長軸方位はN-57°



- 1 暗褐色土 細砂質シルト 焼土粒(径2～4mm)、炭化物(径2～4mm)含む
- 2 暗褐色土 細砂質シルト 焼土粒(径2～4mm)、炭化物(径2～4mm)含む
- 3 暗褐色土 細砂質シルト 焼土粒(径2～4mm)、炭化物(径2～4mm)含む
- 4 暗褐色土 細砂質シルト シルトブロック、焼土粒・炭化物(径2～4mm)含む

第250図 第7号住居跡



第251図 第7号住居跡出土遺物

一Eであった。

カマドおよび貯蔵穴は攪乱のため検出できなかったが、他の住居跡の様相から東壁面にカマドが、またカマドの右側に貯蔵穴が掘り込まれていたものと推定される。

床面はしまりがよく、厚さ5cm前後の貼り床が認められた。柱穴・壁溝・梯子穴などはみられなかった。掘り方は南西部を中心に深く、北東の一部で浅くなっていた。カマド周辺の空間利用に関連する現象であろう。

出土遺物はすべて細片で完形品はみられなかった。出土土器総量は、須恵器片10、土師器片36、計821gで、図示できなかったものを含めた推定個体数は、須恵器碗3、甕1、土師器甕4、台付甕2であった。

1は当住居跡の生活段階にともなうものではないが、残存率や当遺跡における堆積速度の速さなどから、住居廃絶後、長時間を経ずに投棄されたものと考えたい。2～4は覆土中から出土したものである。

形態が把握できるのは1のみで、口縁部が緩やかに外反しつつ肥厚するもので、器高が低く、体部下半に稜をもつことを特徴とする。

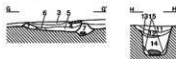
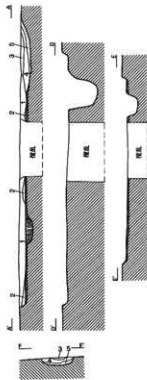
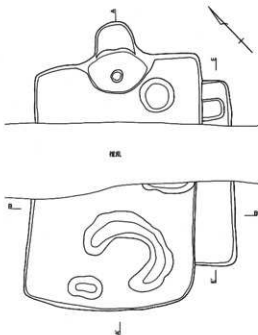
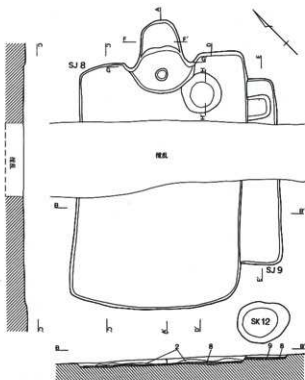
第10表 第7号住居跡出土遺物

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	その他
1	碗	(14.2)	5.1	5.8	ABCEFG	D	橙	30	回転糸切 付高台
2	甕	(20.4)			BCEG	C	灰黄褐	5	
3	台付甕				BEG	C	淡黄	20	外ヘラケズリ
4	台付甕				ABCEFG	B	橙	70	外ヘラケズリ、内ヘラナデ

第8・9号住居跡 (第252～254図、第11～12表)

L-2グリッドに位置し、標高は89.8mであった。住居跡は相互に重複関係にあり、方形に近い第9号住居跡が、長方形の第8号住居跡に先行していた。第9号住居跡埋没途上の凹地を利用して、第8号住居跡が構築されたものであろう。ともに住居のほぼ中央部を、南東から北西方向に走る工場関係の攪乱によって、破壊されていた。

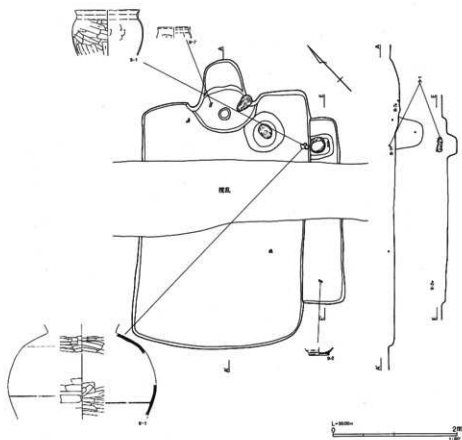
第8号住居跡は、長軸長400cm、短軸長264cm、深さ8cmを測り、竪穴部の主軸はN-47°-Eであった。カマドは北東壁のほぼ中央に造りつけられ、極めて短い袖を備えていた。土壌の流出にともない、カマドの上部構造および袖石などは失われていたが、燃烧部中央に支脚の設置孔が検出さ



- 1 暗褐色土 シルト質細粒砂 焼土粒 (径2~4mm)、炭化物 (径2~5mm) 含む
- 2 黄褐色土 シルト 焼土粒 (径2~4mm)、炭化物 (径2~5mm) 含む
- 3 褐色土 細砂質シルト 焼土粒 (径2~4mm)、炭化物 (径2~5mm) 含む カマド天井部底層土
- 4 暗褐色土 細砂質シルト 焼土粒 (径2~5mm)、炭化物 (径2~5mm)、焼土ブロック含む 竈跡部と天井部化部底層土
- 5 暗褐色土 細砂質シルト 焼土粒 (径2~5mm)、炭化物 (径2~5mm) 含む カマド入口~煙道増幅土
- 6 褐色土 細砂質シルト 焼土粒 (径2~5mm)、炭化物 (径2~5mm) 含む カマド縁部底層土
- 7 褐色土 細砂質シルト 径2~5mmの焼土粒・炭化物含む カマド縁部底層土
- 8 褐色土 細砂質シルト 径5~10cmのシルトブロック、焼土粒含む 和床層
- 9 暗褐色土 細砂質シルト 焼土粒 (径2~5mm)、炭化物 (径2~5mm) 含む
- 10 黄褐色土 細砂質シルト SJ 9配束土
- 11 暗褐色土 シルト 焼土粒 (径2~5mm)、炭化物 (径2~5mm) 含む
- 12 暗褐色土 シルト質細粒砂 焼土粒 (径2~5mm)、炭化物 (径2~5mm) 含む
- 13 褐色土 細砂質シルト
- 14 暗褐色土 シルト 焼土粒 (径2~4mm)、炭化物 (径2~5mm) 含む
- 15 暗褐色土 細粒砂

L=500cm
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15

第252図 第8・9号住居跡



第253図 第8・9号住居跡遺物出土状態

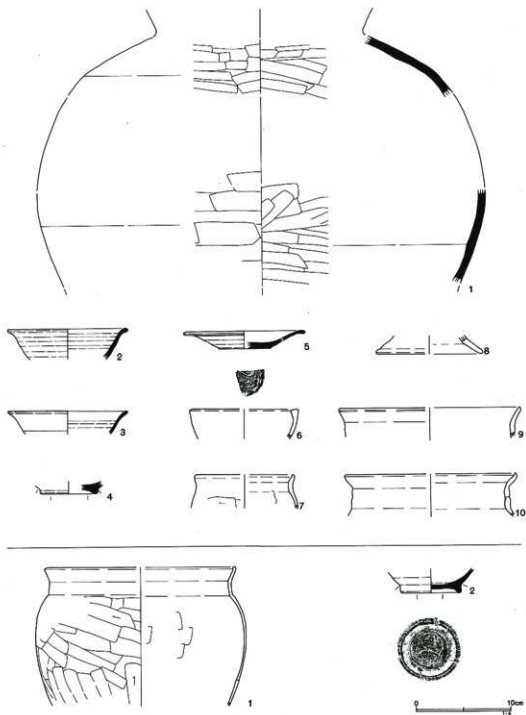
れた。カマドの南脇には円形の貯蔵穴があり、中央から河原石1個が出土した。カマド袖上に検出された結晶片岩とともに袖部の芯材を構成していたものであろう。カマドの軸方位はN-42°-Eであった。床面全面に、2~3cm程度の厚さに細砂質シルトによる貼り床が認められた。柱穴・壁溝等は検出されなかった。掘り方底面は深さが一定せず、南西部には土坑状の掘り込みが認められた。

第9号住居跡は東西方向で297cmを測り、竪穴部の主軸はN-42°-Eと推定される。カマドを初めとした諸施設は第8号住居跡との重複のため検出できなかったが、竪穴部の主軸に対して横長長方形の貯蔵穴のうち3分の2程度が遺存しており、内部に土師器甕が正位で出土した。甕は貯蔵穴内に落ち込んだ状態を示し、底部を欠くことから器台として用いられた可能性が指摘ができる。床面には貼り床がみられるが、柱穴・壁溝・梯子穴等は認められなかった。

出土遺物は両住居跡ともに少なく、カマド・貯蔵穴周辺に集中していた。

第8号住居跡の出土土器総量は、須恵器片8、土師器片80、計498gを計り、図示できなかったものを含めた推定個体数は、須恵器碗2、皿1、甕2、土師器甕3、杯1、台付甕2である。図示したものは、すべて覆土中の出土である。

第9号住居跡の出土土器総量は、須恵器片2、土師器片4、計49gを量り、図示できなかったものを含めた推定個体数は、須恵器碗1、土師器甕1、土師器甕1、土付甕1である。



第254図 第8・9号住居跡出土遺物（上段：第8号住、下段：第9号住）

第11表 第8号住居跡出土遺物

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	その他
1	甕				CEFG	C	灰黄	10	内外ともハケメ状のナデ
2	椀	(12.6)			ACEFG	A	灰	10	
3	椀	(12.6)			ACEFG	D	橙	10	
4	椀			(6.2)	ABEG	D	橙	20	
5	皿	(14.8)	(1.9)	(5.6)	EFG	B	黄灰	20	回転糸切
6	杯	(11.4)			ACG	B	黄橙	5	
7	台付甕	(10.6)			ABCG	B	褐	15	内面口縁にタール状物質付着
8	台付甕			(11.2)	ABEG	B	浅黄橙	20	外面にヘラの圧痕
9	甕	(19.2)			G	B	黄橙	5	
10	甕	(18.2)			ACEG	A	橙	5	外ヘラケズリ、内ハケメ状ナデ

第12表 第9号住居跡出土遺物

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	その他
1	甕	(20.2)			ABCEG	B	褐	65	外ヘラケズリ、内ヘラナデ
2	椀			(6.5)	ACDEFG	C	明赤褐	70	回転糸切 付高台 底部ヘラナデ

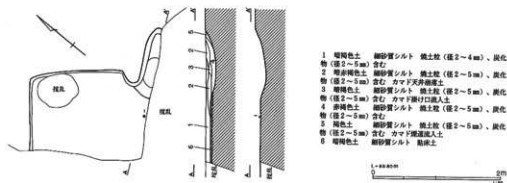
第11号住居跡 (第255～256図、第13表)

L-5 グリッドに位置し、標高は89.4mであった。段丘崖に移行する緩斜面に立地し、第7号住居跡の南に隣接していた。工場建設および解体にともなう攪乱を受けており、竪穴部の北側隅4分の1、およびカマド北半部が遺存したのみであった。竪穴部の主軸はN-51°-Eと推定される。

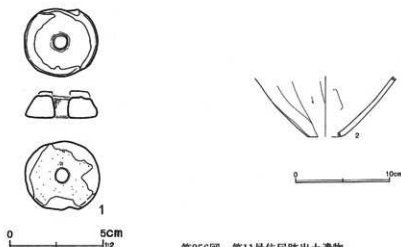
竪穴部は侵食を強く受け、上部の大半が流失していた。

カマドは短い袖をもち、袖部に石材は検出できなかった。カマドの軸方位はN-51°-Eを指し、竪穴部と一致していた。覆土には焼土粒を多く含むが、明確な焼土ブロックはみられなかった。カマドの使用状況を反映する可能性があるが、構築材としての土壌である細砂質シルトの性質を考慮する必要がある。床面には厚さ3cm程度の細砂質シルトによる貼り床が認められるが、柱穴・壁溝等は検出されなかった。

出土遺物は床面直上の1を除き、すべて覆土中出土の土器器片であった。



第255図 第11号住居跡



第256図 第11号住居跡出土遺物

出土土器総量は、土師器甕片68片で、計160gを量る。図示できなかったものを含めた推定個体数は、土師器甕3である。

第13表 第11号住居跡出土遺物

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	その他
1	紡錘車	径 (2.6)~3.8、	厚さ 1.2、	孔径 0.7~0.8、	重さ 18.24		滑石製		
2	甕			(2.6)	ABCEG	B	黄橙	20	外ヘラケズリ、内ヘラナデ

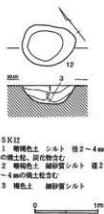
寄居面Ⅰの土坑

寄居面Ⅰにおいて検出された土坑は、第12号土坑に限られる。集落全体の様相からみて多数の土坑が分布していたことは確実であるが、寄居面Ⅰ全体に認められる広い攪乱と激しい侵食による土壌の流出で、相当数の土坑が失われたものと予想される。

第12号土坑 (第257図)

L-2グリッドに位置する。検出面における平面形は不整形であったが、本来の掘り込み面では楕円形であったものと推定される。長軸長86cm、短軸長68cm、深さ30cmで、長軸方位はN-63°-Wであった。底面はすり鉢状で凹凸がなく、壁面は急角度にたちあがっていた。

第25号土坑、第85号土坑の例からみて、第8号あるいは9号住居跡にともなう土坑であったと考えられる。



- S K 12
 1 黄褐色土 シルト 径2~4mm
 の焼土粒、炭化物含む
 2 黄褐色土 細砂質シルト 径2
 ~4mmの焼土粒含む
 3 褐色土 細砂質シルト

第257図 第12号土坑

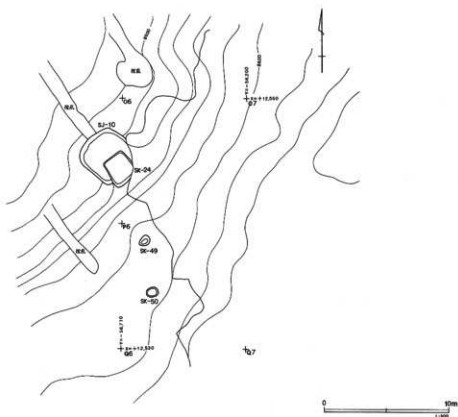
(2) 段丘崖に分布する遺構 (第258図)

段丘崖に立地する遺構は、標高88.0m～89.0mの等高線に挟まれる範囲に分布する。検出されたのは第10号住居跡、第24・49・50号土坑である。立地範囲の東側については広い擾乱のため明らかでないが、住居跡は認められず、一般の居住空間は段丘面に限られるとしてよいだろう。

第10号住居跡・第24号土坑 (第259図)

O-5・6グリッドに位置する。重複関係にあり、第10号住居跡が先行する。立地は段丘崖の最大傾斜地にあたり、周辺の勾配率は20%であった。標高は、第24号土坑南東端で88.7m、第10号住居跡北西端で89.2mである。

第10号住居跡はほぼ正方形平面で、長軸長380cm、短軸長378cm、深さ44cm、長軸方位はN-47°-Wである。カマド・貯蔵穴・柱穴等は検出できなかった。いわゆる堅穴状遺構である。南側には等高線の乱れがあり、テラス状の平場を造成し掘り込んだものとみられる。覆土は細粒砂～中粒砂を主体とし、すべて寄居面Ⅰから流入する自然堆積であった。壁際の5層を除き、炭化物・焼土粒を含み、3層中には平安時代の遺構面を覆う黒褐色シルトが多量に混入していた。床面は平坦に

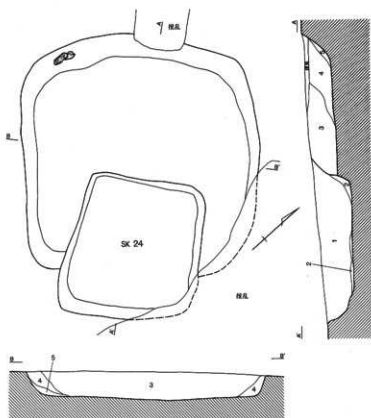


第258図 段丘崖の遺構分布

掘削されている。壁面の立ち上がりは急で、北西側でやや緩傾斜であった。

出土遺物に須恵器はみられず、土師器片4、計49gを得た。推定個体数は、土師器甕および台付甕各1個体である。図示できる遺物はなかった。出土土器および覆土の状況、あるいは面積などから、当竪穴は平安時代集落の一部をなす遺構と考えたい。

第24号土坑はほぼ正方形平面で、長軸長226cm、短軸長208cm、深さ60cm、長軸方位はN-39°-Wである。床面には若干の凹凸が認められ、壁面の立ち上がりも歪みが大きかった。第10号住居跡の埋没後掘り込まれたもので、覆土は第10号住居跡に比べ炭化物を多く含み、有機質土壌であるためより暗色であった。このことは、第24号土坑が掘削された時点で、集落に起源する土壌の堆積がかなり進んでいたことを示している。遺物は検出できなかった。



1 暗褐色土 シルト質細粒砂 径2~4mmの焼土粒、径2~8mmの炭化物を含む
2 褐色土 シルト質細粒砂
3 暗褐色土 シルト質細粒砂 径2~4mmの焼土粒、径2~8mmの炭化物を含む

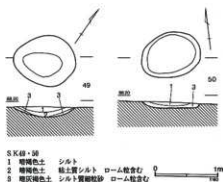
4 褐色土 細粒砂 径2~4mmの焼土粒、径2~8mmの炭化物を含む
5 褐色土 中粒砂

0 1 2m

第259図 第10号住居跡・第24号土坑

第49号土坑（第260図）

P-6グリッドに位置する。段丘崖の下方、緩傾斜となる部分にあたり、標高は88.1mである。楕円形を指向しながらやや不整な平面形で、長軸長101cm、短軸長82cm、深さ16cm、長軸方位はN-63°-Eである。底面はすり鉢状で、壁面の立ち上がりは緩やかであった。



第50号土坑（第260図）

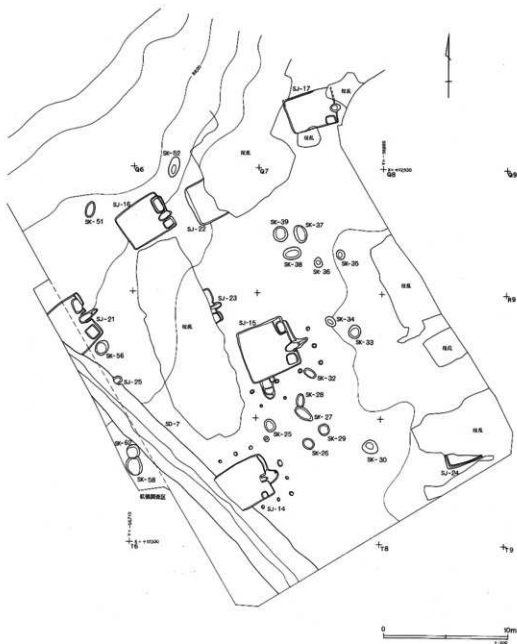
P-6グリッドに位置する。段丘崖の最下部、寄居面Ⅱとの境界にあたり、標高は88.0mである。楕円形平面で、長軸長96cm、短軸長72cm、深さ10cm、長軸方位はN-78°-Eである。底面は平坦で凹凸は少なく、立ち上がりは急であった。



橋ノ下遺跡周辺

(3) 寄居面Ⅱに分布する遺構 (第261~262図)

寄居面Ⅱに分布する遺構は、標高87.2~87.9mの範囲にあたる後背湿地を中心に立地していた。検出された遺構は、第14・15・16・17・18・19・20・21・22・23・24・25・26号住居跡、第1・2号掘立柱建物跡、第25・26・27・28・29・30・32・33・34・35・36・37・38・39・40・41・42・43・44・45・46・47・48・51・52・56・57・58・61・64・65・85号土坑で、竪穴住居跡13軒、掘立柱



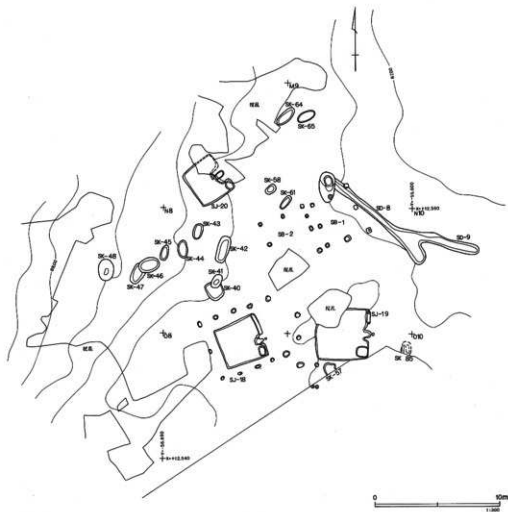
第261図 寄居面Ⅱの遺構分布 (1)

建物跡2棟と土坑32基である。

寄居面Ⅱでは住居相互間、住居・土坑間における出土土器の接合関係が認められた。中心となるのは第16号住居跡で、第14・17・21号住居跡および第39号土坑と出土土器の接合関係がみられた。第14号住居跡では、隣接する第25号土坑との間で出土土器の接合関係が確認され、土坑の帰属関係が推定される。このほか第18・19号住居跡間においても認められている。

特筆されるのは、第14・15・18・19・26号住居跡で堅穴部をとりまくように検出された側柱穴列である。柱穴の土層断面からみると、柱材は平安時代の地盤をなす細砂質シルトで垂直に埋設し、根固めされたもので、確認面および埋設土壌から平安時代の所産であることがわかる。また、堅穴部との企画性および検出された遺構が5例に達したことなどから住居跡にともなう柱穴であると判断した。また、第26号住居跡は集落全体の遺構分布域からやや距離を置いて立地し、カマドが西側に構築されるなど特徴的な様相を示していた。

西側の調査区外には多数の遺構が分布すると考えられるが、明確にする機会は得られなかった。



第262図 寄居面Ⅱの遺構分布(2)

第14号住居跡（第263～268図、第14表）

S-6・7グリッドに位置する。寄居面Ⅱの後背湿地にあたり、標高は87.5mである。付近に第25～32号土坑、第15号住居跡などが分布していた。住居西部は第7号溝によって破壊されている。

竪穴部の形態は長方形で、長軸長420cm以上、短軸長346cm、深さ44cm、主軸方位はN-61°-Eである。

第14号住居跡では、竪穴外に側柱穴列が検出された。側柱穴列は竪穴部の上端から約60～90cmの位置に規則的にめぐり、区画される範囲は推定桁行き4間（560cm）、梁間3間（500cm）を測る長方形であった。柱間はほぼ130～140cmである。柱穴の深さは15cm前後で、柱穴覆土に遺存する柱材痕跡からみると、設置された柱は太さ15cm前後の丸材であったと考えられる。

カマドはほぼ廃絶時の状態で出土した。竪穴部東壁の南よりに造りつけられ、軸方位はN-63°-Eである。カマド上面は住居跡の確認面より2cmほど低いテラス状の掘り込みをもっていた。テラス状部分の周辺は、側柱穴列までの範囲が硬化面となっており、生活空間の一部を構成していたことがわかる。袖部はやや長く地山掘り残しによるが、焚き口部分には点紋石墨片岩が設置されていた。天井部も地山掘り残しによるが、補強のために細砂質シルトを煙道上部に盛り土していた。石材は袖石のほか、焚き口部の天井石がカマド前面に落下していた。袖部の構成土壌は、袖石とともに被熱のため外側まで赤化がみられた。図中の破線は焚き口周辺の被熱範囲を示す。

煮沸具の掛け方については、焚き口幅が27cmと狭いことから一つ掛けであると推定されるが、カマド前面から甕・甕・台付甕などが検出されており、二つ掛けの可能性は残る。

床面には厚さ10cm前後の細砂質シルトによる厚い貼り床が施され、南北壁際の一部を除いて硬化面となっていた。図上では硬化範囲を破線で示した。床面に凹凸はなく、竪穴部の立ち上がりはほぼ垂直であった。柱穴・壁溝等は検出できなかった。

貯蔵穴は、カマドに向かって右側の南側壁際に掘り込まれていた。一辺40cmの方形を呈し、深さ6cmを測るが、内部に遺物は検出できなかった。

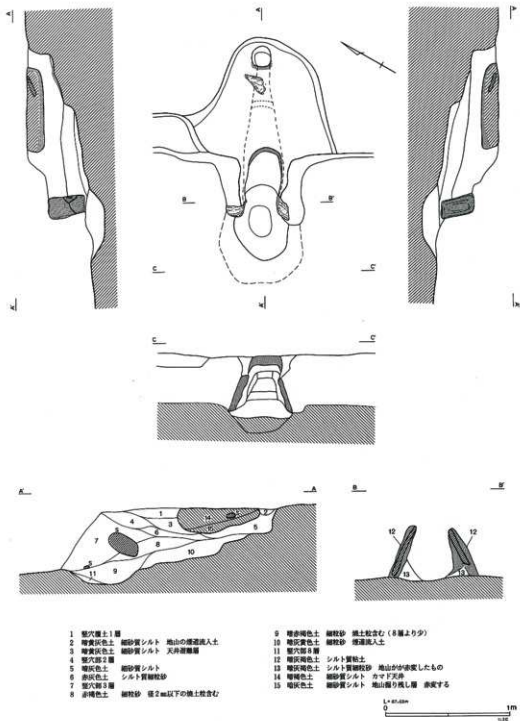
出土遺物は細片が多く、完形品はみられなかった。図示したものうち、1～23はほぼ床面上で検出されたもの、あるいは住居の廃絶直後に投棄されたとみられるもので、24以降は覆土中の出土である。床面近くの遺物はカマド周辺を中心に出土したが、覆土中の遺物は竪穴部の中央付近に集中した。後者が、住居の埋没途中に投棄され、あるいは流入したものであることがわかる。

碗・杯の体部は直線的に外反し、口縁部でやや外湾する。皿には貼りつけ高台をもつものがみられる。石器には磨石・砥石・砥石が認められ、被熱しているものがある。

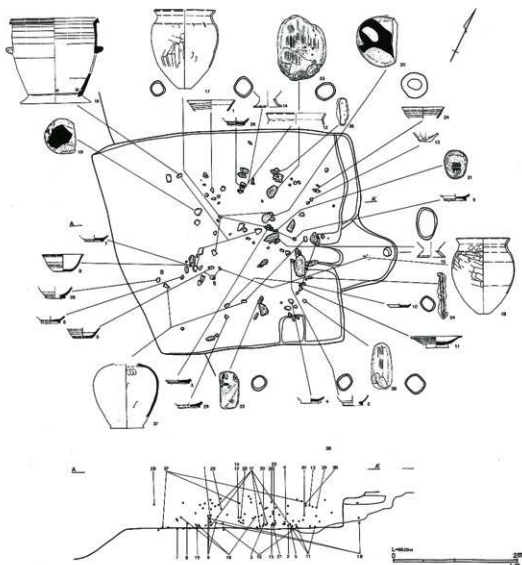
出土土器総量は、須恵器片197、土師器片419、計4681gである。図示できなかったものを含めた推定個体数は、須恵器碗36、杯24、皿8、甕2、甕2、壺1、土師器甕7、台付甕3である。

第14表 第14号住居跡出土遺物

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	その他	
1	碗	(15.4)			ABEFG	B	灰白	10		
2	碗			(6.5)	AEFG	A	灰オリブ	30	付高台	
3	碗			(6.9)	BEFG	D	黄橙	50	回転糸切	付高台
4	碗			(6.2)	DEFG	D	灰オリブ	60	回転糸切	付高台

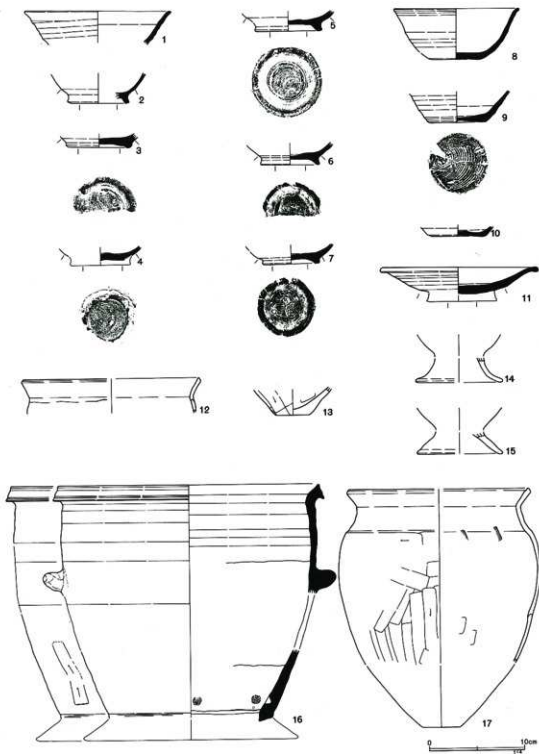


第264図 第14号住居跡カマダ

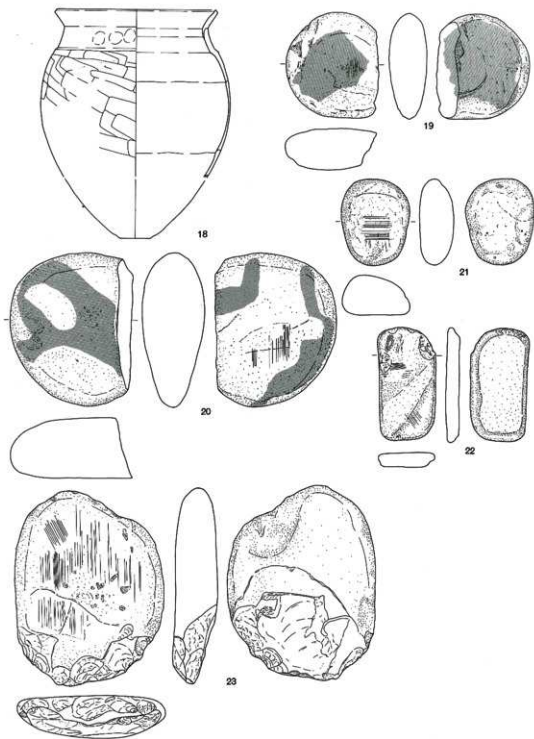


第265図 第14号住居跡遺物出土状態

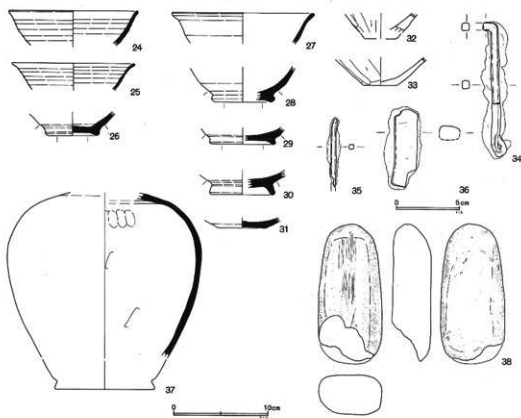
5	椀			(7.1)	ABFG	A	灰	90	回転糸切	付高台
6	椀			(6.2)	ABEFG	D	橙	45	回転糸切	付高台
7	椀			(6.0)	ACEFG	C	黄褐	90	回転糸切	付高台
8	椀	(13.2)	5.4	5.3	ACEG	C	灰白	35	回転糸切	
9	杯			6.3	A~G	A	灰	90	回転糸切	
10	杯			(6.9)	ABDEFG	D	灰オリーブ	95	回転糸切	
11	皿	16.7	2.4	6.9	A~G	B	黄灰	50	付高台	法量は高台除く
12	甕	(18.9)			ABEG	A	褐	30		
13	甕			(3.8)	ABCEG	B	橙	40	一部にタル状物質付着	
14	台付甕			(9.2)	ABCEG	A	橙	25		
15	台付甕			(9.0)	CEFG	A	橙	20	磨耗激しい	
16	甕	(27.6)	24.7	(17.2)	CEFG	A	灰	30	底に棒等を据えて用いたもの	



第266図 第14号住居跡出土遺物 (1) 床面



第267図 第14号住居跡出土遺物（2）床面



第268図 第14号住居跡出土遺物(3) 覆土

17	甕	(19.2)			ABDEG	A	褐	40	外ヘラケズリ、内ハケおよびヘラナデ
18	甕	(19.2)			ABCEG	B	灰褐	40	外面胴下半にタール状物質
19	磨石	長さ11.1、幅 9.7、厚さ4.0、重さ 671.1							中粒砂岩 被熱
20	磨石	長さ16.1、幅12.8、厚さ6.6、重さ2002.4							細粒砂岩
21	磨石	長さ 9.0、幅 7.2、厚さ3.6、重さ 393.8							細粒砂岩
22	砥石	長さ11.8、幅 6.3、厚さ1.6、重さ 199.1							細粒砂岩 敲打痕がみられる
23	敲石	長さ20.4、幅15.6、厚さ4.3、重さ2012.3							粗粒砂岩
24	碗	(13.6)			ACDEFG	D	浅黄	15	回転糸切 付高台
25	碗	(13.0)			ABEFG	B	灰黄	20	
26	碗		5.8		AFG	D	灰白	20	
27	碗	(15.0)			A~EG	C	浅黄	15	
28	碗		(6.8)		B~G	B	黄灰	15	
29	碗		(6.9)		CFG	D	灰白	25	
30	碗		(7.0)		ABCEFG	B	灰白	30	
31	皿		(5.3)		ACEFG	D	黄灰	50	
32	甕		(2.6)		ABCEG	B	橙	45	
33	甕		(3.4)		ABCEG	B	褐	25	
34	把手	長さ10.61、厚さ0.52~0.61、重さ44.75							銅の把手か
35	釘	長さ 5.41、幅0.41、厚さ 1.11、重さ 4.95							
36	工具	長さ 5.13、幅1.92、重さ50.08							
37	長頸瓶	最大径 20.5			CDEFG	A	灰	20	
38	磨石	長さ14.3、幅 6.3、厚さ 4.0、重さ656.3							閃緑岩

第15号住居跡（第269～275図、第15表）

R-6・7グリッドに位置する。寄居面Ⅱの後背湿地中央部にあたり、標高は87.5mであった。近隣には、南に第14号住居跡、北西に第23号住居跡が隣接し、当住居跡と第14・24号住居跡で囲む空間には第25～30・32号土坑が、また当住居跡の東側には第33・34号土坑が、さらに当住居跡と第16・17・22・23号住居跡で囲む空間には第35～39号土坑が分布していた。

第15号住居跡は、竪穴部の東および南側に側柱穴列をもち、南壁の西部に階段状の入り口部をもつことを特徴とする。竪穴部は方形に近い長方形で、長軸長442cm、短軸長416cm、深さ40cm、主軸方位はN-67°-Eである。

側柱穴列は、カマドのある東壁面から南壁面に沿って2面に検出された。竪穴部の上端から側柱穴までの距離は、カマド側で120cm、その他で30cm程度であった。側柱穴列で区画される範囲は、桁行き3間（632cm）、梁間3間（478cm）におよび、柱間は180cm前後であった。このほか入り口部南端両側にも柱穴がみられ、入り口部を覆う庇状施設が存在がうかがえた。入り口部はカマドに正対せず、南壁面に掘り込まれていた。3段の階段状をなし各段12～25cmほどの段差が認められた。

カマドは、非常に短い袖をもつ大形のカマドで、東の壁面に造りつけられていた。軸方位はN-64°-Eである。燃焼部は、石英石片岩・点紋石墨片岩を調整した加工石材および須恵器大甕の破片を壁面に貼りつけて構成されていた。支脚は点紋石墨片岩の加工石材2本を、向かい合う形で内傾させて埋設していた。掛け口には、少なくとも16・17もしくは15に示した2個体以上の甕が掛けられていたもので、支脚の状態からは横並び二つ掛けであったと推定される。

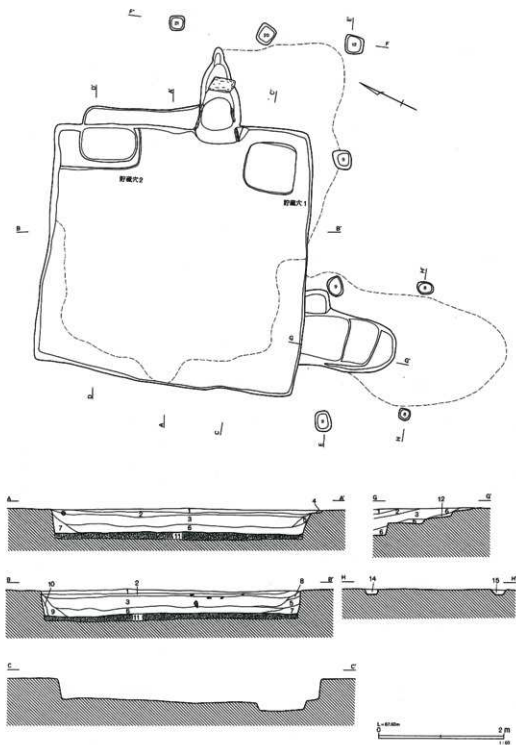
煙道はやや長く、奥部で急激に立ち上がっていた。燃焼部から煙道にかけての壁面は、被熱のため厚さ5cm以上が焼土化していた。煙道部には天井石が設置されていたが、細粒砂の流入にとともに、天井全体とともに崩落したものと思われる。焚き口前面からは、激しい被熱により下面が赤化し剝離が進んだ、点紋石墨片岩の板石が出土した。焚き口に天井石として渡されていたものが、流入土に圧され崩落したものであろう。

また、カマドに向かって左側には棚状施設が検出された。幅145cm、奥行25cmである。

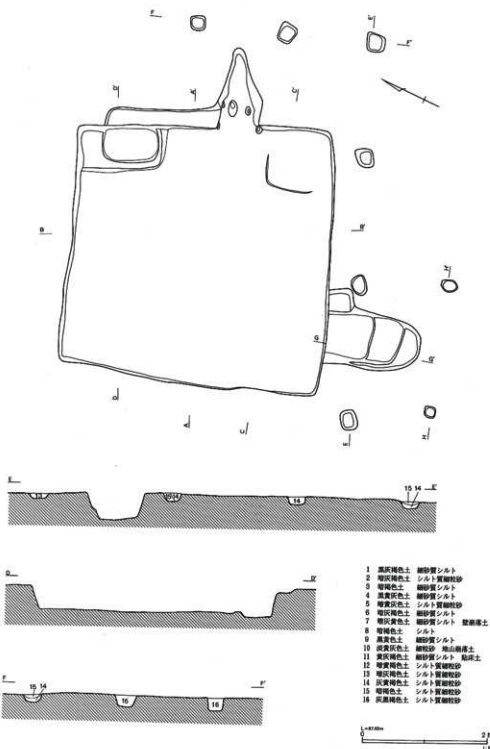
貯蔵穴はカマド両側の壁際に各1カ所、計2カ所が検出された。貯蔵穴1は、カマドに向かって右側に設けられていた。貼り床面から掘り込んだもので、西側底部および立ち上がりは掘り方底面に至っていた。内部からは焼土塊、胴部下半を欠く15の土師器甕、10の刀子などが出土しており、カマドあるいは火の使用に関連した遺物が多く採取された。一方、食物貯蔵に関わる遺物はみられなかった。

貯蔵穴2はカマドの左側に設けられていた。地盤の細粒砂層を台状に掘り残し、中央を長方形に掘り込んで周囲に周堤帯を造り出していた。底面は、貼り床面より若干深く掘り込まれていた。内部からは13・16の土師器甕片が出土したにとどまる。棚状施設との機能的関連が考えられる。

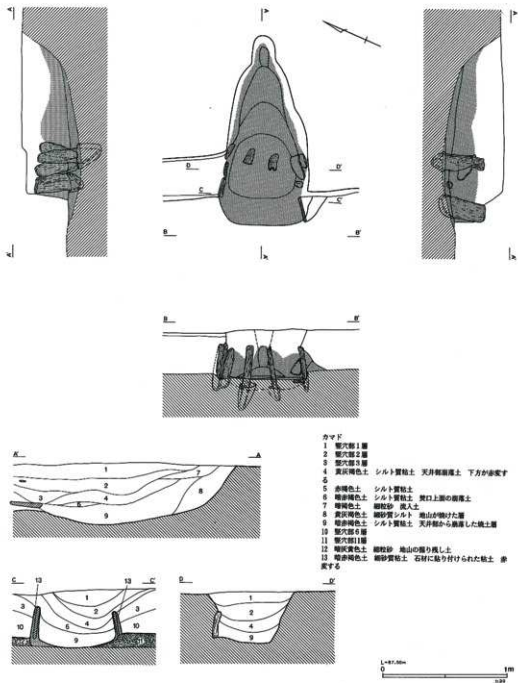
床面に柱穴・壁溝等は認められず、凹凸もみられない。入り口部外側、カマド南側の竪穴外部、および竪穴部床面の大部分には硬化範囲が認められた。入り口部分では、硬化範囲が直線的に住居外へのびていた。これは住居内に至る通路部分が遺存したものであろう。また、カマド南側の竪穴外部における硬化範囲は、竪穴の周囲が居住空間の一部として利用されていたことを示している。



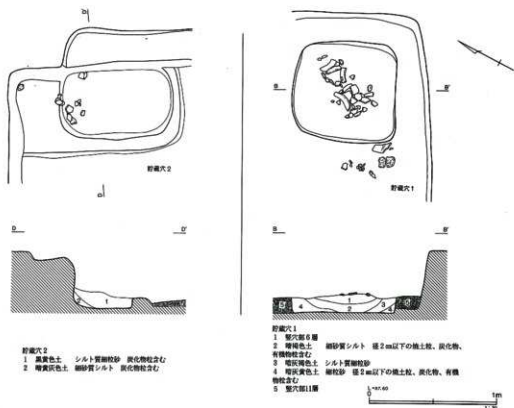
第269圖 第15号住居跡



第270図 第15号住居跡掘り方



第271図 第15号住居跡カマド

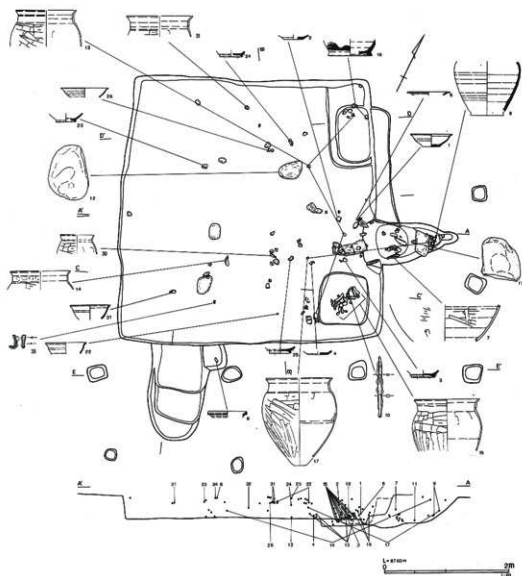


第272図 第15号住居跡貯蔵穴

出土遺物には、石器・鉄器を除くと完形品は含まれておらず、多くが破片として採取された。1～16は床面直上、あるいは住居廃絶時に極めて近い時期の所産とみなされるもので、作りのよい1の須恵器杯の存在が特徴的である。器形は口縁端部が極端に肥厚しつつ外反することを特徴とする。18～33は覆土中の出土遺物である。肥高しつつ上方に外反し、外見上幅広くみえる口縁部をもち、体部に明確な稜線をもつ椀（18・20・22）の存在が目される。出土土器総量は須恵器片141、土師器片560、計3467gである。図示できなかったものを含めた推定個体数は、須恵器椀42、杯11、皿5、甕3、甗1、長頸瓶2、土師器甕7、台付甕3である。

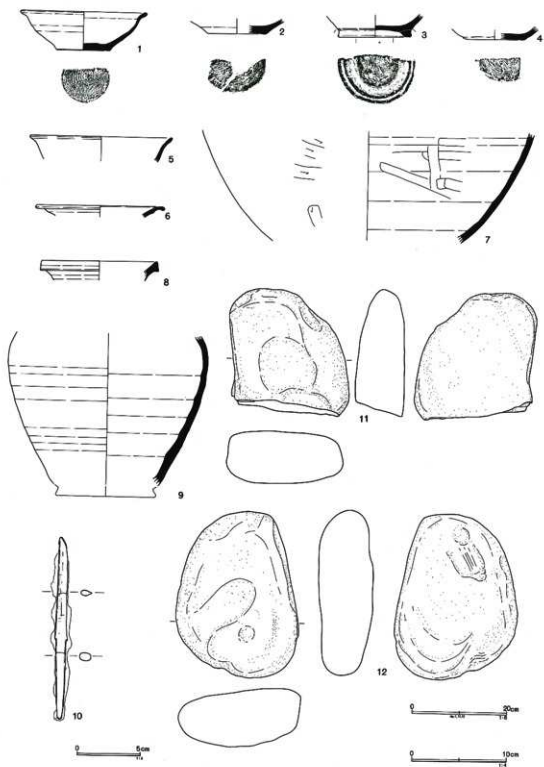
第15表 第15号住居跡出土遺物

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成色調	残存	その他
1	杯	(13.3)	4.1	5.6	EFG	A 灰	45	回転糸切
2	皿			(6.2)	ACEG	D 黄橙	50	回転糸切
3	椀			(7.8)	ACEFG	D 明黄褐	55	回転糸切 付高台
4	杯			(6.6)	EFG	A 灰	30	回転糸切
5	椀	(15.0)			ACEFG	D 灰	20	
6	皿	(13.6)			EFG	A 灰	10	
7	甕				ABEFG	C 橙	10	カマド壁に転用
8	長頸瓶	(12.1)			ABCEG	D 黄橙	15	
9	長頸瓶	最大径21.0			ABCEFG	D 灰オリーブ	25	
10	刀子	長さ14.3、刃部長0.81、同幅0.97、刃部厚さ0.44、重さ26.89						両側 木箱跡残る

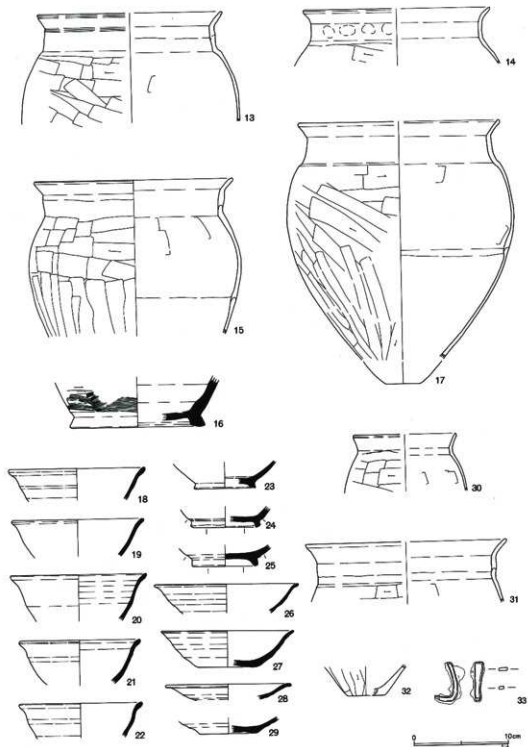


第273図 第15号住居跡遺物出土状態

11	石皿	長さ25.5、幅24.6、厚さ10.8、重さ12086.0					粗粒砂岩	
12	石皿	長さ34.3、幅25.5、厚さ11.2、重さ15826.0					石墨石英片岩	
13	甕	(19.6)		ACEG	A	橙	15	外ヘラケズリ、内ヘラナデ 内面頸部に指頭圧痕
14	甕	(19.6)		ACEG	A	橙	25	外ヘラケズリ 頸部に指頭圧痕
15	甕	(21.1)		ABCEG	A	橙	45	外ヘラケズリ 内ハケメ状ナデ



第274图 第15号住居跡出土遺物 (1) 床面



第275図 第15号住居跡出土遺物 (2) 床面および覆土

16	甕			(14.2)	ABEG	A	灰黄褐	20	外ハケ状工具によるナデ
17	甕	(21.2)	27.5		ABCEG	A	赤褐	20	外ヘラケズリ、内ヘラナデ
18	椀	(14.4)			ACEG	C	暗灰黄	15	
19	椀	(14.0)			ACEG	B	灰	10	
20	椀	(14.4)			EFG	A	灰オリーブ	15	
21	椀	(12.8)			ACG	B	灰白	15	
22	椀	(13.0)			ACEFG	B	橙	10	
23	椀			(6.5)	CEG	B	浅黄	35	付高台
24	椀			(7.4)	BCEFG	B	灰白	50	回転糸切 付高台（ヘラ状工具による回転ナデ） 底ヘラナデ
25	椀			(7.0)	ABCEFG	B	灰黄	60	回転糸切 付高台（ヘラ状工具による回転ナデつけ）
26	杯	(15.2)			CEFG	B	灰白	5	
27	杯	(14.0)	3.8	(6.2)	ACEFG	D	黄橙	20	回転糸切
28	皿	(13.4)			AEGF	A	褐灰	10	
29	皿			(6.0)	ACEFG	B	灰オリーブ	25	回転糸切
30	台付甕	(10.9)			ABCEG	A	橙	25	外ヘラケズリ、内ヘラナデ
31	甕	(21.2)			ABCEG	A	橙	20	外ヘラケズリ、内ハケメ状ナデ
32	甕			(4.1)	ABCEG	A	橙	30	外ヘラケズリ、内ヘラナデ
33	釘	現存長3.09、幅0.75、厚さ0.35、重さ5.16							両端部を欠く

第16号住居跡（第276～282図、第16表）

Q-5・6グリッドに位置する。段丘崖から寄居面Ⅱに至る緩斜面にあたり、標高は87.8mであった。東に第22号住居跡が隣接し、西に第21号住居跡、南に第23号住居跡、周囲には第51・52号土坑が分布していた。第16号住居跡は、今回の調査で生活状況をほぼ完全に把握できる唯一の住居跡であった。

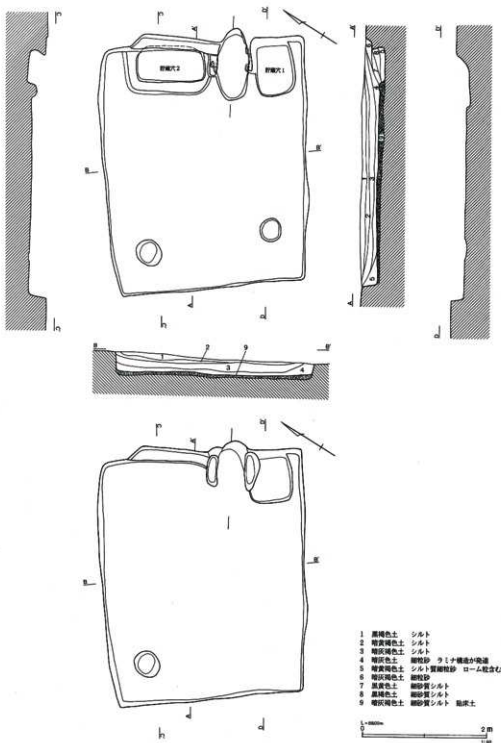
床面から12cmほどの厚さに、クロスラミナが発達する細粒砂（4層）が堆積していた。この層は荒川の増水によるものと考えられ、生活面を覆い多量の完形土器を包含していた。

竪穴部の形態は主軸方向に長い長方形で、長軸長392cm、短軸長326cm、深さ32cm、主軸方位はN-56°-Eである。側柱穴などの竪穴外施設は検出されなかった。

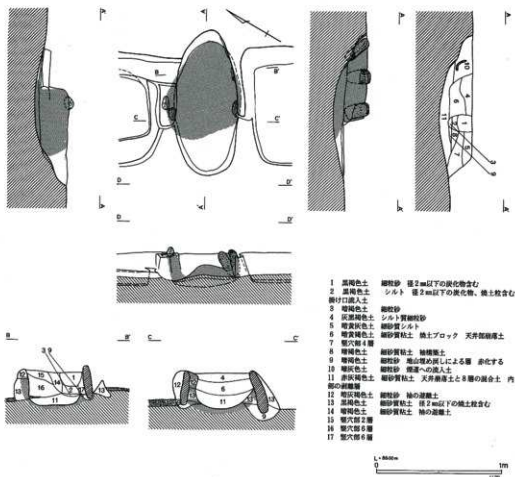
カマドは東壁に造りつけられ、やや長めの袖と極めて短い煙道をもっていた。軸方位はN-57°-Eである。袖部は、点紋石墨片岩・細粒砂岩などを成形した加工石材を芯材とし、これに細砂質粘土（13層）を薄く貼りつけて構築されていた。支脚および設置孔は検出されなかったが、燃焼部からは20・21の土師器甕が、また貯蔵穴1からは23の台付甕が出土するなど、複数の煮沸具を使用した状況が看取された。焚き口の広さ等と併せて、二つ掛け以上の形態をとったものと思われる。

カマドに向かって左側の壁面には、棚状施設が認められた。幅170cm前後、奥行15cmである。上面に遺物は検出できなかった。

貯蔵穴は、カマドの左右両側床面に各1カ所検出された。カマドに向かって右側の貯蔵穴1は、住居の主軸方向に長い長方形で、長軸長81cm、短軸長62cmである。内部からは、13と18の灯明皿が重ねられた状態で出土し、他に23の台付甕、カマド用石材と思われる結晶片岩等が検出された。カマドあるいは火に関連した道具を収納した状況がうかがえる。



第276図 第16号住居跡

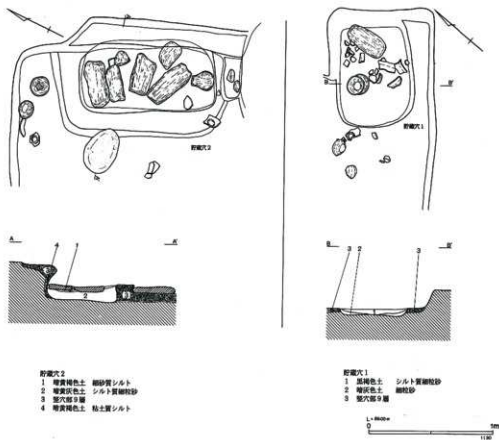


第277図 第16号住居跡カマド

カマドに向かって左側の貯蔵穴2は、貼り床土で周堤帯を設け貯蔵穴の形態を整えたもので、長軸長108cm、短軸長54cmである。内部からは石墨片岩の板状石材が同一レベルで面的に出土した。貯蔵穴上部に設けられた施設から、落ち込んだものと考えられる。

床面には、厚さ10cm前後の細砂質シルトが貼り床として敷設されていた。柱穴・壁溝などは認められなかったが、カマドに正対する西側の壁近くには、浅いビット状の窪み2カ所が検出された。これらは床面を窪めた程度であり、置き柱の痕跡であると考えられる。

出土遺物は、1～24、38～40が床面直上あるいはこれに準ずるもので、その他は覆土中より出土した。カマドおよび貯蔵穴付近で完形土器が多量に出土し、南壁近くの床面ではつぶれた状態のものも多くみられた。また、堅穴部中央では、床面から若干浮いた状態で、大形の土器片が多量に採取された。カマド正面・南壁際で40の磨石・39の敲石が出土し、貯蔵穴2の前面では石皿38が設置された状態で検出された。貯蔵穴2と北壁との間隙には1・7・24の椀・台付甕などが堅穴部の壁上から落ち込んだ状態で出土しており、周囲の空間の使用状況が窺われる。

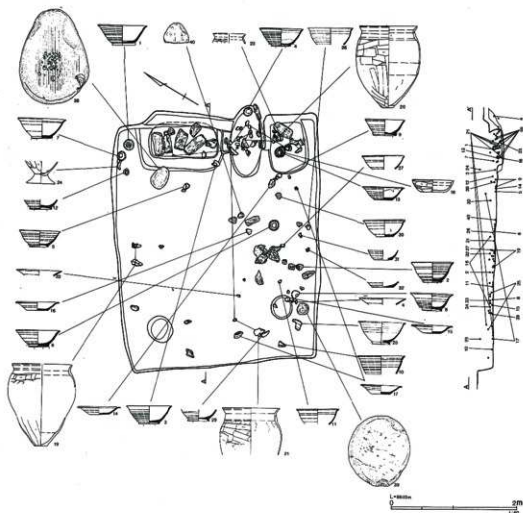


第278図 第16号住居跡貯蔵穴

床面付近の出土遺物の器形は、須恵器碗が体部下方でやや丸みを帯びつつ直線的に外反し、さらに弱い「く」字状に外反する口縁部をもつことを特徴とし、須恵器皿では直線的な体部から口縁部が急に反り返りながら外反する形態をとる。

接合関係は多岐にわたり、第14・17・21号住居跡・第39号土坑のそれぞれに、第16号住居跡出土土器の破片が混入していた。

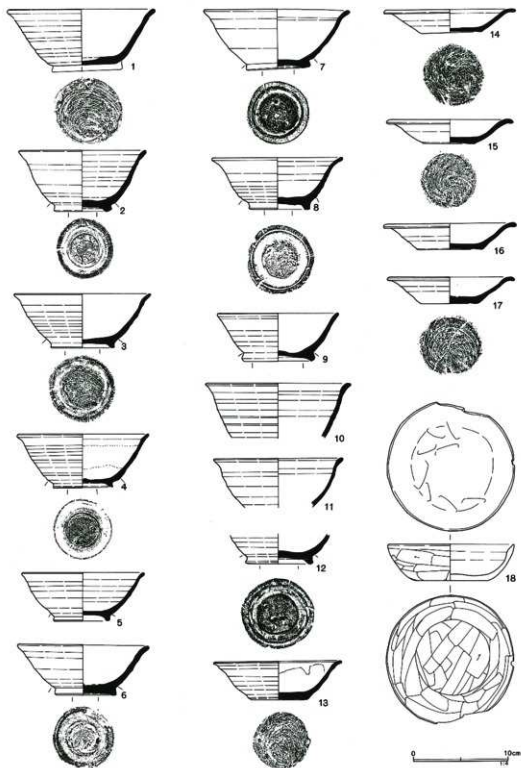
出土土器総量は、須恵器片101、土師器片183、計4464gである。推定個体数は、須恵器碗21、杯10、皿13、甗1、長頸瓶1、甕1、土師器甕7、台付甕2である。なお、第14・17号住居跡、および第39号土坑と接合した破片は小片であったため、図示できなかった。



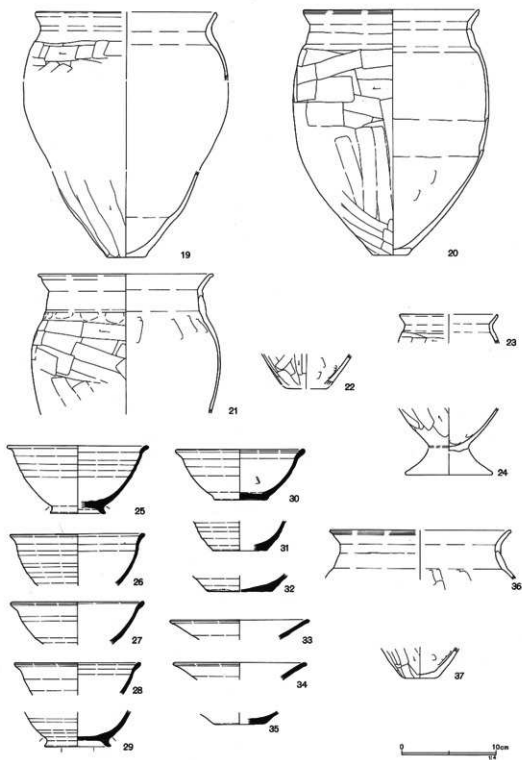
第279図 第16号住居跡遺物出土状態

第16表 第16号住居跡出土遺物

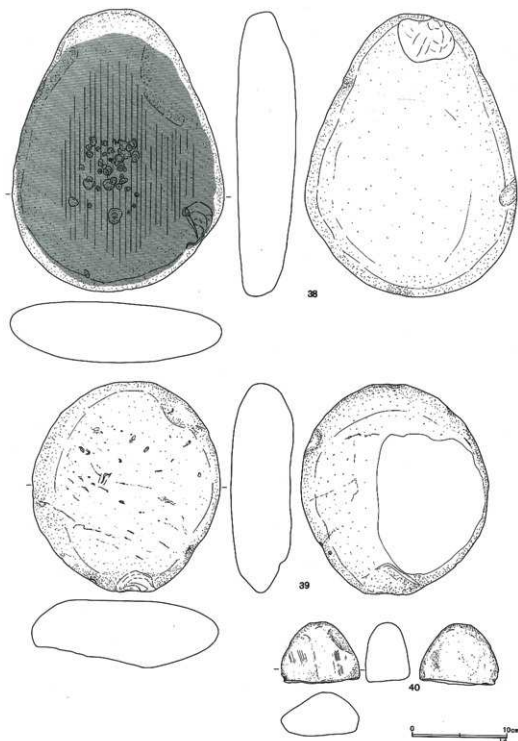
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	その他
1	碗	15.6	(6.5)	(7.4)	ABEFG	C	灰黄	95	回転糸切 付高台 (ヘラ状工具による回転ナデつけ)
2	碗	(13.4)	6.4	6.4	ABCEFG	D	黄褐	40	回転糸切 付高台 (ヘラ状工具による回転ナデつけ)
3	碗	(14.4)	5.7	6.7	ACEFG	B	灰黄	65	回転糸切 付高台 (ヘラ状工具による回転ナデつけ)
4	碗	13.9	5.7	6.4	ABCDFFG	C	灰黄褐	95	回転糸切 付高台 (ヘラ状工具による回転ナデつけ) 灯明皿
5	碗	(12.9)	5.1	6.0	ABDEFG	A	灰	55	回転糸切 付高台 (ヘラ状工具による回転ナデつけ)
6	碗	13.8	5.5	6.5	ABDEFG	A	灰オリーブ	100	回転糸切 付高台 (ヘラ状工具による回転ナデつけ)



第280图 第16号住居跡出土遺物 (1) 床面



第281図 第16号住居跡出土遺物（2）床面および覆土

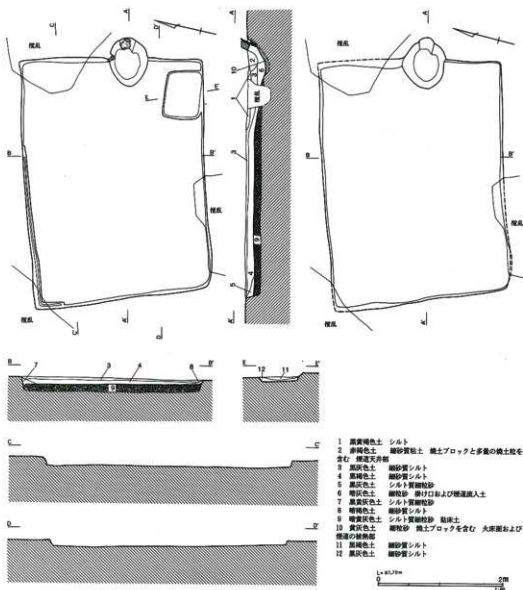


第282図 第16号住居跡出土遺物 (3) 床面

7	碗	15.4	6.4	6.2	AC~G	D	黄褐	100	回転糸切 付高台 (ヘラ状工具による回転ナデ) 底ヘラナデ
8	碗	(13.8)	5.4	6.5	ACEFG	B	灰ナデ	70	回転糸切 付高台 (ヘラ状工具による回転ナデつけ)
9	碗	(12.9)	5.1	7.1	ACEFG	D	黄灰	65	回転糸切 付高台 (ヘラ状工具による回転ナデつけ)
10	碗	(15.3)			BCEFG	B	黄橙	35	SJ21 付近採取破片と接合
11	碗	(13.6)			ACEFG	B	灰ナデ	15	
12	碗			(6.8)	ACEFG	C	黄灰	90	回転糸切 付高台 (ヘラ状工具による回転ナデつけ)
13	杯	13.6	4.1	5.7	ACEFG	D	黄褐	100	回転糸切 灯明皿 SJ21 出土片と接合 欠損後も使用したためタールが二重に付着する
14	皿	13.8	2.4	6.2	ABCEFG	C	黄	100	回転糸切
15	皿	(13.3)	2.5	5.5	BEFG	C	灰黄	35	回転糸切
16	皿	(13.9)	2.7	(7.0)	BCEFG	C	灰黄	25	回転糸切
17	皿	13.4	2.3	6.0	ACEFG	A	灰	75	回転糸切
18	杯	13.4	3.9	8.0	ABCGH	A	褐	95	南北企産 灯明皿 欠損後も使用したため、タールが二重に付着する 13と重なって出土
19	甕	(19.2)	25.7	4.6	ABCEG	A	褐	15	外ヘラケズリ
20	甕	18.6	25.9	3.2	ABCEG	B	淡橙	40	外ヘラケズリ、内ヘラナデ 胴部下 半にタール状物質付着
21	甕	18.6			ABCEG	B	黄橙	75	外ヘラケズリ、内ハケ目状ナデ
22	甕			(4.2)	ABCEG	A	褐	40	外ヘラケズリ、内ヘラナデ
23	台付甕	(10.4)			BCEG	B	橙	25	外ヘラケズリ
24	台付甕			(4.2)	BCEG	A	黄橙	20	外ヘラケズリ、内ヘラナデ
25	碗	(14.9)	7.1	(5.8)	CEG	A	灰	30	回転糸切 付高台 (ヘラ状工具による回転ナデ) 底ヘラナデ
26	碗	(14.2)			CEFG	B	灰ナデ	20	
27	碗	(14.1)			AEFG	C	黄橙	15	
28	碗	(12.2)			CEFG	C	灰黄	10	
29	碗			(7.0)	EFG	A	灰	20	回転糸切 付高台 (ヘラ状工具による回転ナデつけ)
30	杯	(13.7)	5.3	5.6	CEFG	A	灰	35	回転糸切
31	杯			(5.9)	CEFG	C	橙	20	回転糸切
32	杯			(7.0)	BCEFG	C	黄橙	25	回転糸切
33	皿	(14.8)			ABCEFG	A	灰	15	
34	皿	(14.1)			ABCEFG	A	灰	10	
35	皿			(5.2)	CEFG	B	灰黄	25	回転糸切
36	甕	(19.2)			ABCEFG	A	明黄褐	15	外ヘラケズリ、内ヘラナデ
37	甕			(4.1)	ACEG	A	橙	45	外ヘラケズリ、内ヘラナデ
38	石皿	長さ29.6、幅22.2、厚さ6.3、重さ5585.5g							輝石安山岩 擦痕・敲打痕
39	石皿	長さ22.0、幅19.8、厚さ6.3、重さ4129.2g							細粒砂岩
40	磨石	長さ6.4、幅8.3、厚さ4.5、重さ243.4g							細粒砂岩

第17号住居跡 (第283~284図、第17表)

O-7 グリッドに位置する。寄居面Ⅱの後背湿地奥部にあたり、標高は87.4mであった。東が調査区外となるため周辺の遺構分布は明確ではないが、第16・22号住居跡とで囲む空間には第35~39



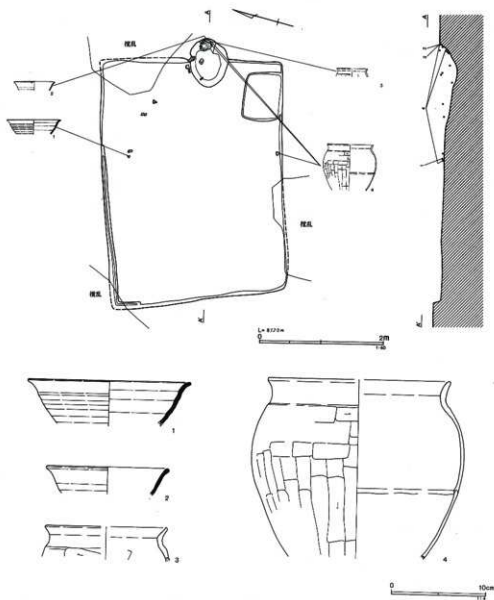
第283図 第17号住居跡

号土坑が集中していた。土坑の集中地点は、南15mに位置する第15号住居跡との中間点にあたる。

竪穴部は主軸方向に長い長方形で、長軸長388cm、短軸長289cm、深さ13cm、主軸方位はN-74°-Eである。

カマドは東壁に造りつけられていた。軸方位はN-73°-Eである。袖をもたず、燃烧部左壁面には棒状の点紋石墨片岩が芯材として埋め込まれていた。煙道部の形態は断面調査によって確認されたもので、煙り出し内部から細粒砂岩と5の土師器甕が出土した。土師器甕は、煙突として設置されたものであろう。支脚および設置孔はみられず、煮沸具の掛け方は捉えられなかった。

カマドの右側には貯蔵穴が存在し、長軸長36cm、短軸長30cmの長方形であった。内部に遺物は

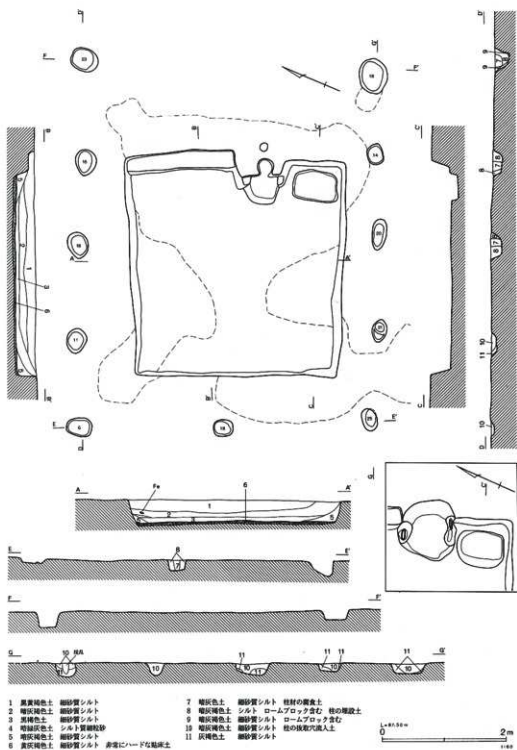


第284図 第17号住居跡遺物出土状態・出土遺物

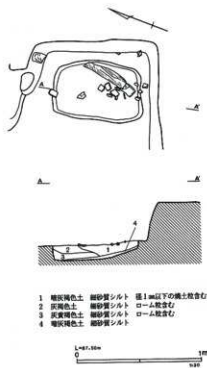
検出できなかった。

床面は、シルト質細粒砂（9層）をもって貼り床としていた。柱穴は検出されなかったが、北西壁下に浅い壁溝が遺存していた。

出土遺物はカマド周辺に集中していた。1～5はすべて床面直上で検出されたものである。5の土師器甕は、小形で頭部の「コ」字形が崩れつつある。1の須恵器碗は、内面に稜線が認められる。出土土器総量は須恵器片12、土師器片105、計867gで、図示できなかったものを含めた推定個



第286図 第18号住居跡



第287図 第18号住居跡貯蔵穴

カマドは竪穴部東壁に造りつけられ、軸方位はN-66°-Eである。天井上部の厚みが失われているものの、廃絶時に近い状態で出土した。長楕円形をなす、すり鉢状の燃焼面を下部構造とし、箱形の天井および壁体を上部構造とする。煙道は短く、棚状施設の奥行と同じ距離に煙り出しが設けられ、側柱穴列の区画外には掘り込みをとまう排気設備はみられなかった。第17号住居跡同様、土師器甕を連結して煙突を作り、屋外に排気していたものと考えられる。

上部構造は竪穴部に突出し、左壁（いわゆる左袖）がL字状に燃焼部を囲んでいた。壁（袖）の芯材には、部分的に整形された点紋石墨片岩・細粒砂岩が用いられていた。天井には細砂質シルトを用い、焚き口上部に棒状の点紋石墨片岩を架構して掛け口（器設部）をなしたと思われる。架構石材は熱による亀裂のため2つに割れ、天井から転落していた。天井は全体に赤化していた。

支脚は細粒砂岩製磨石の転用品で、斜めに起立した状態で検出された。設置部位は燃焼部中央のやや左で、設置孔をもたず細砂質シルトによって根固めされたものと思われる。天井部の状況から一つ掛けであったと推定されるが、内部からは須恵器甕片、土師器甕片のほか、19の台付甕も出土しており、二つ掛けとした蓋然性は高い。

カマドに向かって左側には、棚状施設が造りだされていた。幅177cm、奥行24cmで、上面に遺物は検出できなかった。

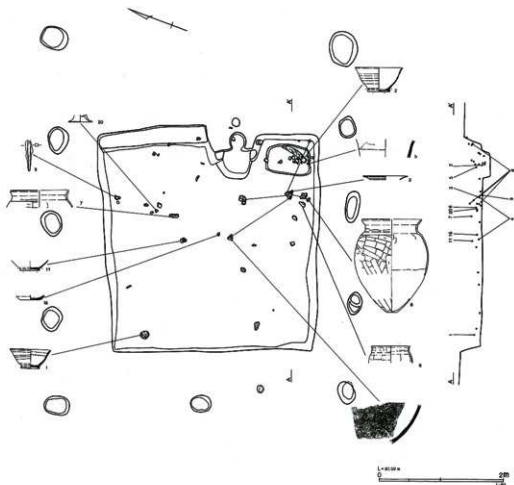
貯蔵穴はカマドに向かって右側に検出された。長方形平面で、長軸長68cm、短軸長48cm、深さ12cmである。カマドの廃材と考えられる被熱した結晶片岩、2の須恵器甕、5の壺等が出土した。

竪穴部の床面には、細砂質シルトの貼り床（6層）が施されており、柱穴・壁溝等は検出されな

N-8、O-8グリッドに位置する。寄居面Ⅱの後背湿地にあたり、標高は約87.3~87.4mであった。東に第19号住居跡が隣接し、北には第40~48号土坑が集散的に分布していた。第19号住居跡出土の17の土師器甕に接合する土器片を出土したことから、第19号住居跡と先後関係があるものと考えられる。

覆土は細粒砂を主体とし、床面はハードな細砂質シルト主体の3層によって覆われていた。

第18号住居跡は側柱穴列をもち、竪穴部・側柱穴列で区画される範囲ともに主軸方向に長い長方形であった。竪穴部の規模は、長軸長362cm、短軸長344cm、深さ36cm、主軸方位はN-66°-Eであった。側柱穴列は、桁行き4間（606cm）、梁間2間（512cm）で、桁行きの柱間は約150cm前後である。柱穴の深さは9~24cm前後と浅く、柱材の腐食に起源をもつと思われる7層から径10cm程度の丸木材による側柱が直立していたことが推定された。柱間には側壁が設置されていたものと思われるが、痕跡は検出できなかった。

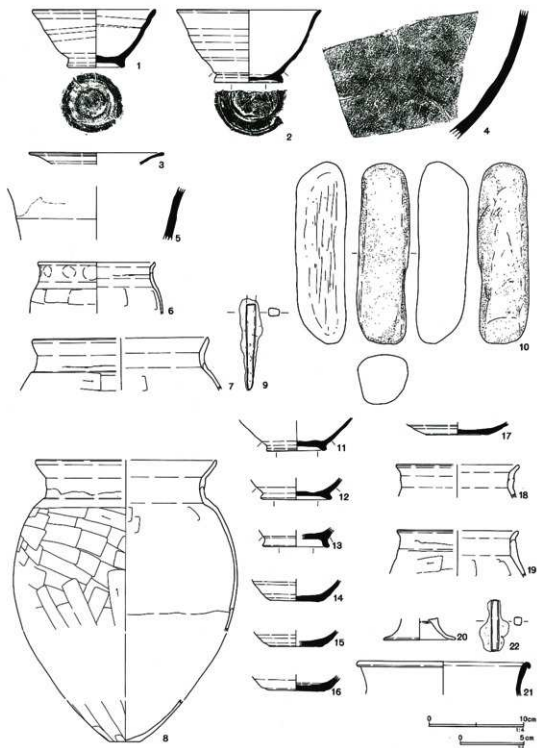


第288図 第18号住居跡遺物出土状態

かった。床面の硬化範囲は、竪穴部ではカマド・棚状施設・貯蔵穴周辺のほか、西および南側に顕著にみられ、竪穴外部ではカマドおよび南西隅周辺に認められた。竪穴外部の硬化範囲は、一部が側柱穴列で囲まれる範囲の外に連続しており、住居の入り口部が南壁西隅部に設けられていたものと思われた。

出土遺物は、多くが1・2層に含まれる細片であった。1～10は、床面直上で検出されたものあるいはこれに準ずるもので、当住居跡にともなうものと考えられる。その他は覆土中の出土である。須恵器碗は、大形のもの(2)と小形のもの(1)がみられ、体部は中央にやや丸みを帯びつつ直線的に立ち上がり、緩く外反する口縁部をもつ。須恵器皿の口縁部についても類似の状況を示す。

出土土器総量は須恵器片319、土師器片319、計3052gで、図示できなかったものを含めた推定個体数は、須恵器碗17、杯9、皿5、甕2、甗2、壺1、土師器甕3、台付甕4である。



第289图 第18号住居跡出土遺物

第18表 第18号住居跡出土遺物

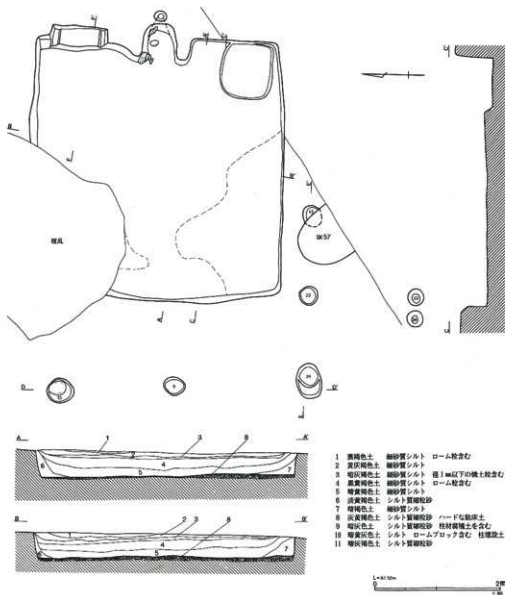
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	その他
1	椀	13.0	6.1	6.1	ABCEFG	D	黒褐	85	回転糸切 付高台 (ヘラ状工具による回転ナデつけ) 底ヘラナデ
2	椀	(15.2)	7.7	(7.2)	ACEFG	D	黄橙	40	回転糸切 付高台 (ヘラ状工具による回転ナデつけ) 底ヘラナデ
3	皿	(14.2)			BEFG	D	黄橙	15	
4	甕				ABDEFG	A	黄灰	10	外タタキ後ヘラナデ
5	長頸瓶				AEFG	A	灰	10	外面に自然軸付着
6	台付甕	(12.5)			ABCEG	A	橙	30	口縁部に指頭圧痕
7	甕	(18.6)			ACEG	A	浅黄橙	20	外ヘラケズリ、内ヘラナデ
8	甕	(19.1)	29.5	(3.1)	ABCEG	A	橙	30	外ヘラケズリ、内ヘラナデ 外面にタール状物質付着
9	刀子	長さ6.37、幅0.75、厚さ0.62、重さ14.09							茎部分
10	支脚	長さ19.0、幅5.3-5.4、重さ1022.0							中粒砂岩 砥石の転用品
11	椀			(6.4)	CEFG	D	橙	80	回転糸切 付高台 (ヘラ状工具による回転ナデつけ) 底ナデ
12	椀			(7.5)	ABEFG	D	黄褐	50	回転糸切 付高台 (ヘラ状工具による回転ナデつけ)
13	椀			(7.1)	ABCEG	C	黄橙	25	回転糸切 付高台 (ヘラ状工具による回転ナデつけ)
14	杯			(5.6)	ACEFG	A	灰	45	回転糸切
15	杯			(5.8)	ACEFG	A	灰	20	回転糸切
16	杯			(7.0)	ABCEFG	A	灰	30	回転糸切
17	皿			(6.6)	ACEFG	A	オリブ灰	45	回転糸切
18	台付甕	(13.0)			ACEG	A	灰褐	20	内ハケメ状ナデ
19	台付甕	(12.8)			ABCEG	B	橙	35	外ヘラケズリ、内ヘラナデ
20	台付甕			(7.6)	ABCEG	A	橙	35	
21	壺	(20.4)			ABEG	D	褐	10	
22	釘?	長さ4.1、厚さ6.1、重さ13.15							両端部を欠く

第19号住居跡 (第290-295図、第19表)

N-9、O-9グリッドに位置する。寄居面Ⅱの後背湿地中央部にあたり、標高は87.3-87.4mであった。東に第18号住居跡が隣接し、北に第1・2号掘立柱建物跡、北西には土坑群が分布していた。南側については、調査区外となるため遺構分布は明らかにできなかった。北西隅に深さ2m以上の工場建築物の基礎がうたれ、攪乱されていた。また、17の土師器甕に接合する細片が第18号住居跡の覆土中より検出されている。

竪穴部は、主軸方向にやや長い長方形で、西および南辺に側柱穴列を有していた。竪穴部の規模は長軸長420cm、短軸長408cm、深さ30cm、主軸方位はN-90°-Eであった。

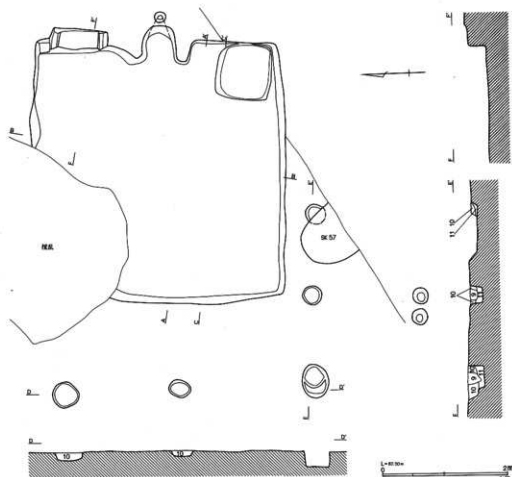
側柱穴列は西および南辺のほか、調査区域の土手斜面断面で2か所が検出された。これは、第15号住居跡にみられる入り口部に共通する在り方である。柱穴の深さは9-24cmで、径15cm程の丸木材が用いられたと推定される。側壁の痕跡は捉えられなかった。側柱穴列で囲まれる範囲の規模は桁行き4間以上(608cm以上)、梁間3間(442cm)で、柱間は約150cmである。



第290図 第19号住居跡

カマドは東壁中央に造りつけられ、第18号住居跡と同様に箱形の上部構造をもったものと推定された。軸方位はN-90°-Eである。煙り出しは短く垂直に開口し、周囲9cm程が被熱のため赤化していた。壁（袖）は、細～粗粒砂岩を芯材として粘土質シルト（7層）を塗り付けたもので、左右とも平面L字状となるが、左の張り出しが大きかった。支脚は棒状の細粒砂岩で、燃焼部中央左に埋設されていた。燃焼部中央は灰の掻き出しにより焼土はみられず、非常に固く焼きしまっていた。煮沸具の掛け方は、支脚のあり方からみて横並び二つ掛けが想定できる。

カマドに向かって左側には、棚状施設が造りつけられていた。幅90cm、奥行30cmで、両端に深さ4cmほどの溝が掘り込まれていた。木製棚等の上部構造の反映であろう。上面北端部に8の須



第291図 第19号住居跡掘り方

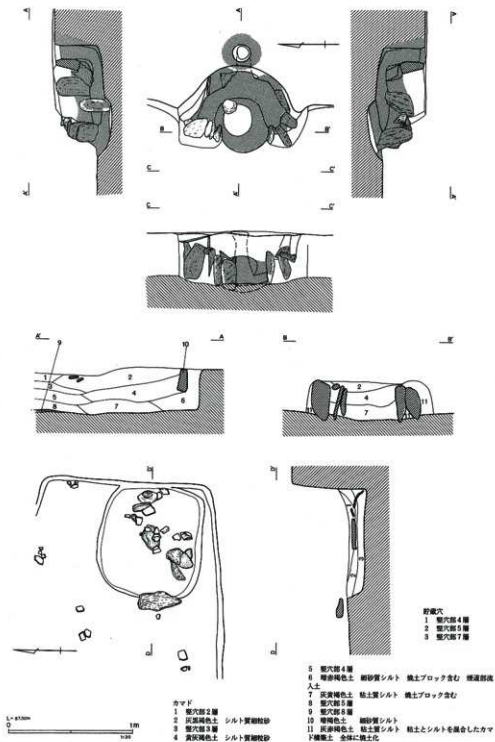
恵器杯が正位に置かれた状態で出土した。

カマドに向かって右側の南東隅には、一辺84cm 四方の方形の貯蔵穴が掘り込まれていた。深さは12cm 前後で、5の碗、6・7の杯、11の皿、18・20の磨石・敲石が出土した。

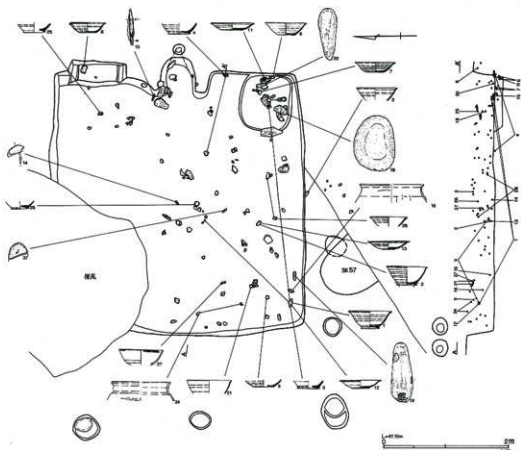
出土遺物は覆土中の破片が多く、住居にともなうと思われるものはカマド・貯蔵穴・棚状施設周辺に限られた。1～20が床面直上、あるいはこれに準ずる出土遺物で、他は覆土中の出土である。カマド・貯蔵穴・棚状施設・南側の壁際周辺には、碗・杯・磨石・敲石など食生活関連の遺物が集中し、覆土中の遺物は中央やや南側、および西側の壁際に集中した。

床面出土の土器は、碗・杯とも内外面に多くの稜線がみられ、体部に丸みを帯び、極端に肥厚しながら短く外反する口縁部をもつ。

出土土器総量は須恵器片140、土師器片690、計4297gである。図示できなかったものを含めた推定個体数は、須恵器甕4、碗41、杯14、皿7、土師器甕8、台付甕1である。



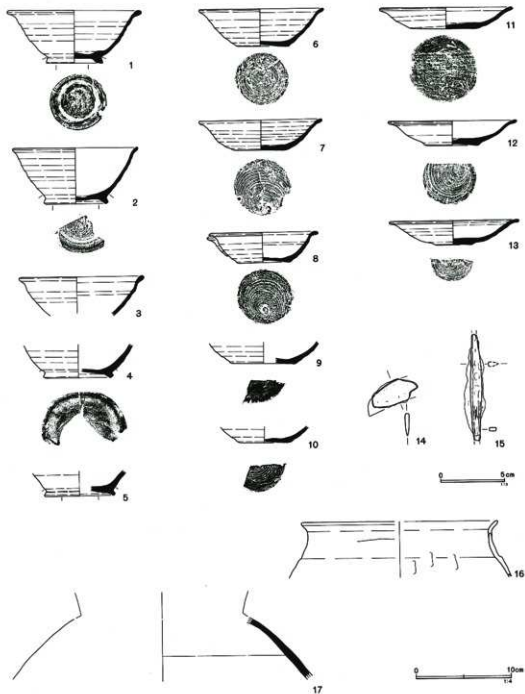
第292図 第19号住居跡カマド



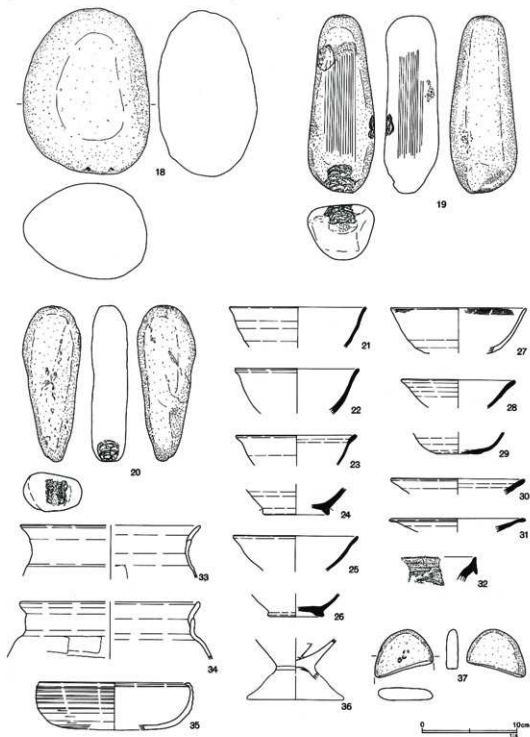
第293図 第19号住居跡遺物出土状態

第19表 第19号住居跡出土遺物

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	その他
1	碗	(14.1)	5.5	5.9	BEFG	B	灰	65	回転糸切 付高台 (ヘラ状工具による回転ナデつけ) 底ナデ
2	碗	(13.2)	(5.9)	(6.7)	AEFG	A	褐灰	25	回転糸切 付高台 (ヘラ状工具による回転ナデつけ)
3	碗	(14.2)			BCEFG	B	黄橙	20	
4	碗			(7.4)	ABCEFG	D	黄橙	40	回転糸切 付高台 (ヘラ状工具による回転ナデ) 底ヘラナデ
5	碗			(7.4)	ABDEF	C	灰白	25	回転糸切 付高台 (ヘラ状工具による回転ナデつけ) 底ナデ
6	杯	13.2	3.9	5.6	ACEFG	A	灰	80	回転糸切
7	杯	13.0	3.2	5.7	ABEFG	C	灰白	70	回転糸切
8	杯	(11.5)	3.2	5.6	AEFG	A	灰	65	回転糸切
9	杯			(6.8)	AEFG	D	灰黄	25	回転糸切
10	杯			(4.9)	ABEFG	A	灰	30	回転糸切
11	皿	14.0	2.3	7.0	ABDEFG	B	灰黄	100	回転糸切
12	皿	13.6	2.6	5.1	ABEFG	A	灰	50	回転糸切
13	皿	(13.6)	2.5	3.9	AEFG	A	灰	40	回転糸切
14	鐎	長さ3.9、厚さ0.95~0.34、重さ8.40							



第294图 第19号住居跡出土遺物 (1) 床面



第295図 第19号住居跡出土遺物（2）床面および覆土

15	刀子	長さ8.4、幅1.00～0.43、厚さ3.6、重さ20.6							
16	堯	(20.6)			CEFG	B 浅黄橙	20	内ヘラナデ SJ19 貯蔵穴、SJ18 覆土が接合風化の度合いから SJ19 に属するか、該当時期のものと思われる	
17	堯				ABEFG	A 灰	15		
18	石皿	長さ17.3、幅13.3、厚さ10.2、重さ3283.4							
19	砥石	長さ18.4、幅 6.8、厚さ 5.6、重さ1134.0						粗粒砂岩	
20	敲石	長さ16.3、幅 6.1、厚さ 4.1、重さ 565.1						中粒砂岩 敲石として使用 細粒砂岩	
21	碗	(14.4)			CEFG	D 灰	20	付高台	
22	碗	(13.2)			AEFG	A 褐	20		
23	碗	(12.7)			AEG	A 灰オリーブ	15		
24	碗		(7.0)		ACDEFG	D 黄橙	30		
25	碗	(13.2)			ACEFG	D 黄橙	20		
26	碗		(6.0)		AEFG	D 橙	40		
27	碗	(14.2)			AEFG	A 橙	20		内面口縁にハケメ状のナデ
28	杯	(12.0)			ABEFG	B 灰	20		
29	杯		5.2		BFG	A 灰	40		回転糸切
30	皿	(14.2)			BEFG	A 灰	10		
31	皿	(14.3)			AEFG	D 灰黄	10		
32	堯				AEFG	A 暗青灰	5	内面口縁ハケメ状ナデ 外ヘラケズリ	
33	堯	(19.0)			ABCEG	A 橙	25		
34	堯	(19.0)			ABCEFG	A 明赤褐	45		
35	杯	(16.8)	5.0	(8.8)	ABEFG	A 橙	25		
36	台付堯				ABCEFG	A 橙	5		脚除く底径4.1
37	磨石	長さ 5.0、幅 6.0、厚 1.8、重さ51.3						細粒砂岩 敲石打痕あり	

第20号住居跡（第296～298図、第20表）

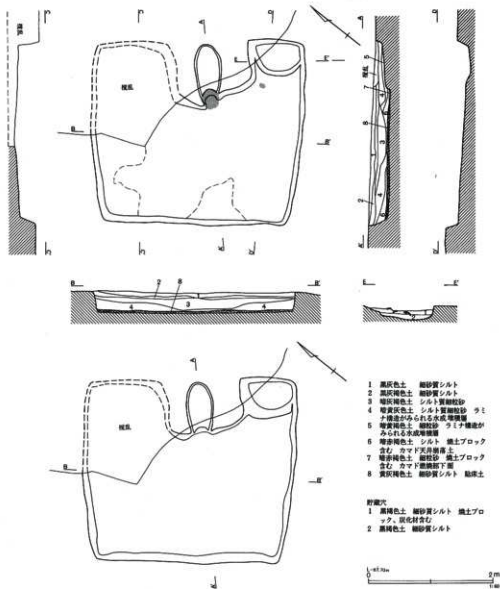
M-8グリッドに位置する。段丘崖と寄居面Ⅱの境界線にあたり、標高は87.4～87.6mであった。他の堅穴住居跡からは視覚的にやや距離を置いており、周辺には第1・2号掘立柱建物跡のほか、土坑群の分布がみられた。北から東側にかけて、工場建築物の基礎による深い攪乱が入り、カマドの上部構造および貯蔵穴の覆土上層を含め、堅穴部の4分の1程度が失われていた。

覆土はシルト（6層）がわずかに堆積した後に、クロスラミナが発達する4層および5層の堆積がみられた。住居廃絶後一定の期間をおいて荒川の小規模な増水が起こったことを示している。第16号住居跡にみられたものと同じの堆積物と考えられる。

堅穴部の形態は主軸と垂直の方向に長い長方形で、他の住居跡とは様相を異にする。規模は、主軸方向で292cm、主軸と垂直方向で340cm、深さ30cmで、主軸方位はN-53°-Eであった。

カマドは東壁面に構築されるが、著しく長く厚い袖基部をもつことを特徴としていた。攪乱のため天井部・袖部などの上部構造は不明であったが、袖部先端に芯材の痕跡はなく、焼土の分布範囲および焼きしまりの範囲が非常に狭かった。軸方位はN-51°-Eであった。第14号住居跡と類似形態のカマドと想定され、煮沸具については一つ掛けの蓋然性が高い。

貯蔵穴はカマドに向かって右側の壁際に掘り込まれていた。攪乱土を取り除いた結果検出された。長方形平面で、南北90cm、東西57cm、深さ12cmであった。底面は壁面付近で平坦だが、西側



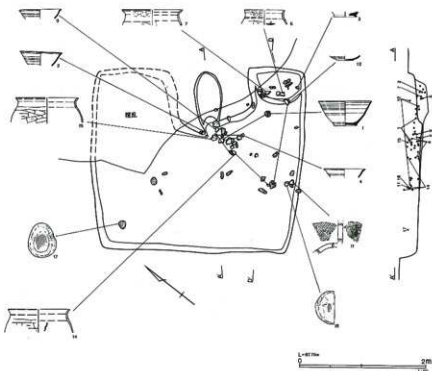
第296図 第20号住居跡

ですり鉢状となる。内部から3の須恵器碗、12の皿、6の台付甕、7の土師器甕が出土した。

床面には厚さ3～4cmの細砂質シルトによる貼り床が施されていた。柱穴等は検出できなかった。

出土遺物は相対的に少なく、細片が主体を占めた。8～15が覆土中の出土で、埋没途上の住居跡の窪みに投棄されたものと考えられるが、その他は住居跡にともなうものと考えられる。下方に丸みを帯びつつ口縁部まで直線的のびる体部に、低い高台が付く1・2の碗がみられる。

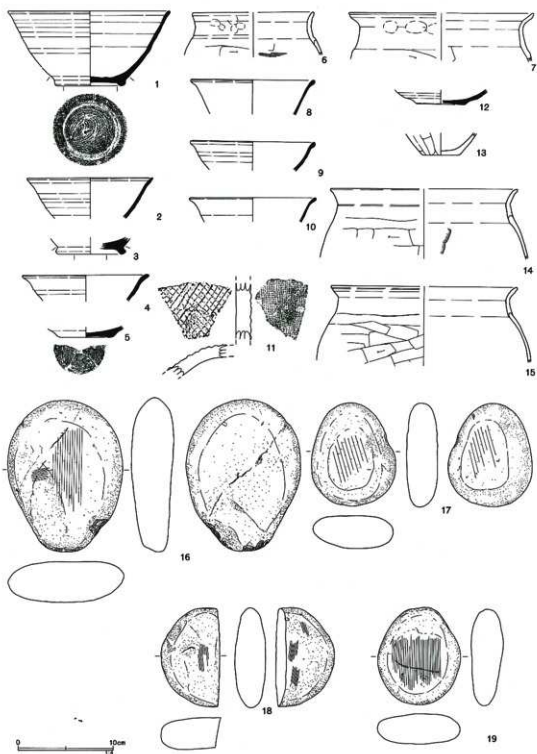
出土土器総量は、須恵器片30、土師器片83、瓦片1、計1010gである。図示できなかったものを含めた推定個体数は、須恵器碗11、杯5、皿2、甌1、土師器甕3、台付甕1である。



第297図 第20号住居跡遺物出土状態

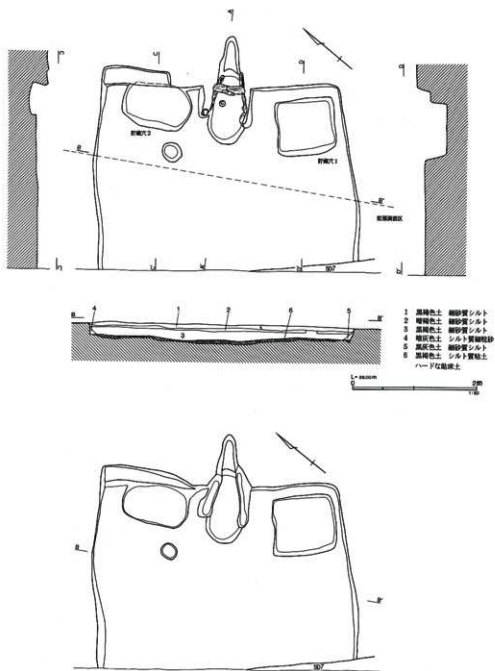
第20表 第20号住居跡出土遺物

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	その他
1	碗	(17.1)	7.8	7.4	ABCEFG	D	灰黄	45	回転糸切 付高台 (ヘラ状工具による回転ナデつけ)
2	碗	(13.2)			ABDEFG	D	黄	10	
3	碗			(7.3)	ACEFG	D	黄褐	25	回転糸切 付高台 (ヘラ状工具による回転ナデつけ)
4	杯	(13.2)			ACEFG	C	黄橙	20	
5	杯			4.3	ABEFG	D	褐	75	回転糸切
6	台付甕	(12.8)			ABCEG	A	橙	20	外面口縁下に指頭圧痕
7	甕	(19.6)			ABCEFG	B	橙	15	外面口縁下に指頭圧痕
8	碗	(12.9)			ABEFG	C	灰黄	20	
9	碗	(13.2)			ABCEFG	C	黄橙	15	
10	碗	(13.4)			AEFG	B	灰黄	10	
11	平瓦				ABEFG	C	灰褐	5	凹面布目、凸面タタキ
12	皿			5.2	AEFG	A	灰黄	65	回転糸切
13	甕			4.2	ABCEG	A	褐灰	50	風化したタール状物質付着
14	甕	(19.7)			ABCEFG	A	橙	35	外ヘラケズリ、内ヘラナデ
15	甕	(19.6)			ABCEG	A	明赤褐	20	外ヘラケズリ、内ハケメ状ナデ
16	磨石	長さ15.8、幅12.1、厚さ4.4、重さ1233.6							中粒砂岩 敵石兼用
17	磨石	長さ10.8、幅8.9、厚さ3.3、重さ513.7							閃緑岩
18	磨石	長さ13.6、幅6.2、厚さ3.2、重さ329.1							中粒砂岩
19	磨石	長さ10.1、幅8.6、厚さ3.4、重さ434.7							中粒砂岩

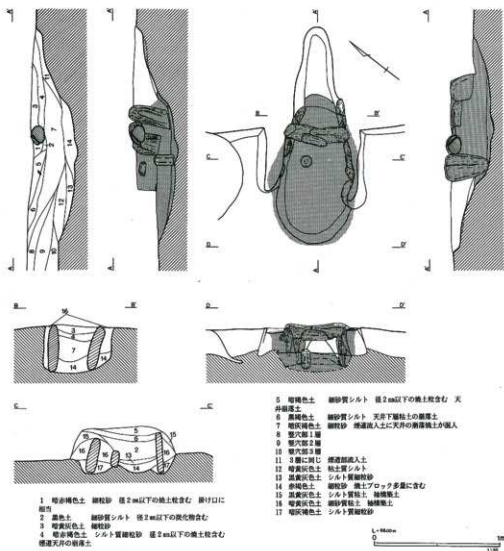


第298图 第20号住居跡出土遺物

第21号住居跡 (第299～304図、第21表)



第299図 第21号住居跡



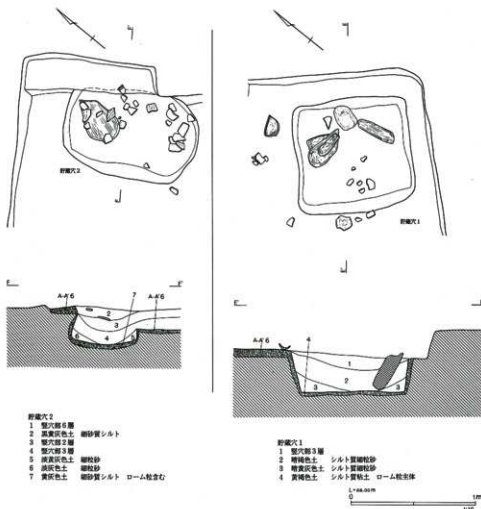
第300図 第21号住居跡カマド

R-4 グリッドに位置する。段丘崖と寄居面Ⅱの境界線にあたり、標高は87.8mであった。第56号土坑が隣接し、南に第25号住居跡、北東に第16号住居跡、東に第15・23号住居跡が分布していた。西部部は中世段階の第7号溝によって破壊されており、これより西では調査区外となる。

覆土には、褐色系で有機質の細砂質シルトが、最も顕著に堆積する住居跡であった。

堅穴部は主軸方向に長い長方形であったと思われ、短軸長420cm、深さ24cm、主軸方位はN-51°-Eを指すものと推定される。

カマドは袖・煙道ともにやや長く、軸方位はN-54°-Eである。燃烧部には羽口を転用した19の支脚が据えられ、天井には棒状の石英石片岩が架構されていた。袖部は点紋石墨片岩を主体とした石材を芯とし、これにシルト質粘土(15層)および細砂質粘土(16層)を貼りつけて構築されていた。袖部は赤色に焼きしまっていた。天井構築土壌は明確でなく、陥没した状態であった。

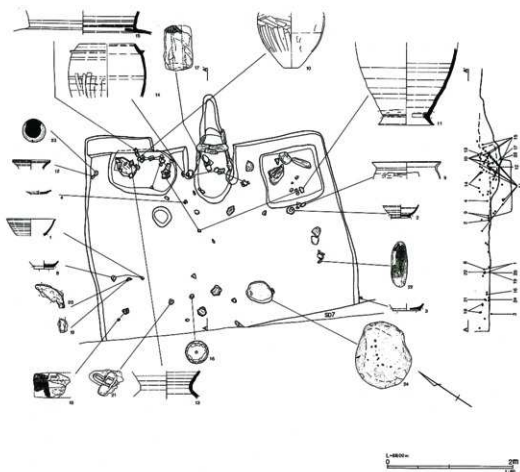


第301図 第21号住居跡貯蔵穴

カマドに向かって左側の壁には、棚状施設が造りつけられていた。棚面には、住居床面にみられる貼り床と同質の、シルト質粘土が貼りつけられていた。幅105cm、奥行24cmであった。

貯蔵穴は、カマドの左右に各1カ所ずつ検出された。貯蔵穴1はカマドに向かって右側にあり、90cm四方の正方形で、深さは30cmに達していた。内部の底面・側面にはシルト質粘土が貼りつけられ、細粒砂層の地山の崩壊を防ぐ。被熱により赤化した結晶片岩および細粒砂岩の板状の加工石材が複数出土し、他に貯蔵穴2出土の破片と接合する11の飯片が検出された。被熱した石材はカマド芯材に用いられていたものと思われるが、その後、再利用されたものであろう。

貯蔵穴2はカマド左側の棚状施設の前面にみられ、楕円形平面であるが、長方形を意図したとみられる。長軸長105cm、短軸長70cm、深さ12cmである。底面・壁面には細砂質シルト（7層）が貼りつけられ、内部からは被熱をみない板状の片岩と11の飯片、15の甕片、10の土師器甕底部が検



第302図 第21号住居跡遺物出土状態

出された。

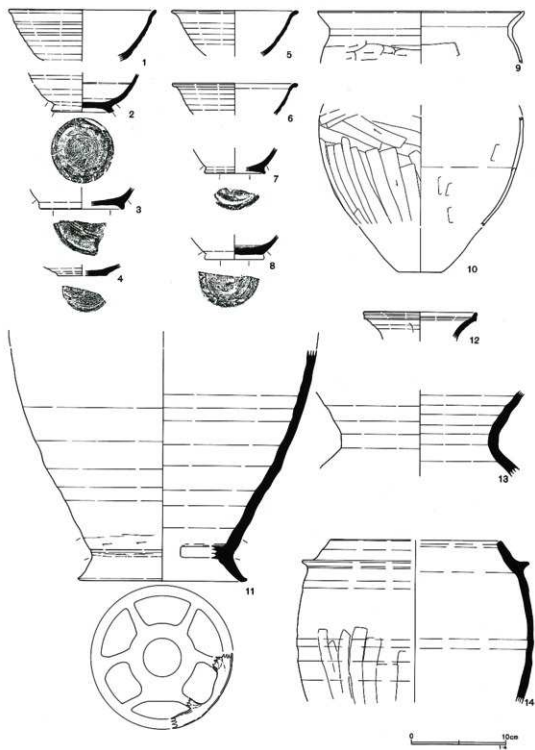
床面には貼り床が施されるが、明確な柱穴・壁溝等は認められなかった。

出土遺物は5・8・20・23が覆土中の出土で、その他は当住居跡にともなうか廃絶後間もなく投棄されたものと考えられる。

羽口、須恵質の紡錘車がみられ、大形の台石とともに住居中央部に集中していた。また、壁際には明確に火を受けた磨石が認められた。貯蔵穴1の西側上端にみられる2の碗の下、床面付近では、第16号住居跡出土の13の須恵器杯に接合する破片が出土した。

出土土器総量は須恵器片98、土師器片76、計3174gで、図示できなかったものを含めた推定個体数は、須恵器碗16、杯10、皿4、甕3、甗1、羽釜1、長頸瓶1、紡錘車1、土師器甕3である。

住居跡にともなう須恵器碗は、体部下半で丸みを帯びつつ上部へ直線的に外反し、肥厚しながら短く外反する口縁部を有するものが認められたが、底径が大きく低い高台がつくものなどもみられた。



第303図 第21号住居跡出土遺物 (1)